
私たちは浮遊してゆく

斉藤せち

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

私たちは浮遊してゆく

【Nコード】

N4630D

【作者名】

斉藤せち

【あらすじ】

金なし、職なし、男なし　トリプルパンチの27歳のチハルとやよい、みゆうの3人は10畳のワンルームマンションで、限られた若さと時間を持って余しながら暮らしている。そんなある日、暇つぶしに出かけた漫画喫茶で、チハルとやよいは漫画をひたすら模写する不思議な小学生、勇気に出会う。一切の感情を排除したように、黙々と漫画本のコピーを作り出す勇気を見て、チハルは興味を抱くが、話しかけてみると、彼はかわいげのかけらもない、生意気そのもの子供で。

私たちは浮遊してゆく

第一章

部屋の隅では誰がどこで買ってきたのか、巨大なスノーピーのぬいぐるみが埃を被って笑っている。もしかしたら、誰かがどこかで貰ってきたものかもしれない。いずれにせよ、うちに来てから放つたらかして、誰もしまったり、処分したりしようとしないので、邪魔になってしょうがない。十畳一間の部屋には、私、ヤイちゃん、みゆうの三人が煎餅布団をくっつけて雑魚寝をしていて、床は新聞の折り込みチラシだとか、私の描きかけの漫画の原稿だとか、食べかけのお菓子の袋だとか、誰かが脱ぎ捨てたブラジャーだとかパンツだとかTシャツだとか、CDや雑誌やDVDの類が散乱して足踏み場もない。真ん中に置かれた唯一の家具らしい家具であるちゃぶ台の上には、昨日三人で飲んだビールの空き缶や、食べかけのスルメやピーナッツやインスタントラーメンのカップがそのままの状態で放つたらかされていて、器の底に残ったラーメンの汁が、油っこい臭いを放っている。部屋の一角に申し訳程度に設置されているシンクの流しには、一週間の間でたまった、洗っていない食器類が山のようになっていて、周りをたかる小バエがブンブンとうるさい羽音を立てていた。

私は布団の中でもぞもぞと寝返りを打ち、枕元の目覚まし時計に目を遣った。時計は正午を指している。起き上がると、昨日のお酒が残っているのか、頭が少しズキズキと痛んだ。テレビを点け、「笑っていいとも」のオープニングが流れる画面をぼんやり見つめていると、音がうるさかったのか、隣で寝ていたみゆうが目覚ました。

「んっ、うっん……」

窓から射し込んでくる光に、眩しそうに目を細めた彼女は、二日酔いと低血圧ですこぶる機嫌が悪そうだ。「今、何時？」と訊く声が、ひどく擦れていた。

「もう十二時やで、みゆう」

「十二時？ まだ早いやん……」

そう言うのと再び枕に顔を埋めて眠ろうとしたので、私はその骨ばった華奢な体をゆすって、彼女を起こした。みゆうは鬱陶しそうにショートカットの髪をくしゃっとさせながら起き上がると、タンクトップにショーツという格好のまま、のそのそと這うように洗面台に向かい、床にべったりと座り込んで歯を磨き始めた。

「あはごはん、もうはめた？」

歯ブラシを突っ込んだまま喋るので、「朝ごはん、もう食べた？」と聞くみゆうの声は、ひどくくぐもっている。私が「まだ」と答えると、彼女はやっとウーンと伸びをしながら立ち上がり、軽く口をすすいだ後で、「じゃあ、何か買ってこようか」と、こっちを振り返って言った。

「ほんまに？ じゃあ頼んでもいい？」

「いいよ。何がいい？」

「そつやなあ……、サンドイッチとかおにぎりとか。あとヤイちゃんの方もお願い。ヤイちゃん、何がいいんかな……？」

私は隣でまだすやすやと寝息を立てている、もう一人の同居人の顔を覗き込んだ。お酒が飲めなくせに私たちに付き合って、真っ先に潰れてしまった彼女は、全く目を覚ますそぶりもなく熟睡している。

「まあ、何か適当に買ってきて。たぶん何でも大丈夫やと思うし」

「オツケー、じゃああたしが行ってる間に、チハルはヤイ子起こしといて」

「分かった。ありがと」

みゆうはそこらへんに脱ぎ捨てられてあった、薄汚れたＴシャツと短パンを拾って着ると、アパートから一番近いコンビニへと出かけていった。

彼女が出ていった後で、私はもう一度、自分の隣で眠っている、おそろしく顔立ちの整ったヤイちゃんの寝顔を見る。柔らかくウエ

ーブのかかったロングヘアの下から覗く、まつげの長い大きな目。上品にスツと通った鼻筋の下には、桜の花びらのような薄桃色の、厚みのある唇がくっついていて。女優にでもなれそうなくらい完璧な顔の造りは、同じ女でこんなにも違うものかと、神様に嫉妬してしまいたくなるほどだ。

さて、この眠り姫を、一体どうやって起こしてやるうか。

童話に出てくる意地悪な魔法使いにでもなったつもりで、あれこれ考えを巡らせながら辺りを見回していると、ふとテレビの横に置いてある、埃とり用のはたきに目が止まった。

私はそれを彼女に気付かれないよう、そつとテレビの横から取つてくると、ツンと尖った彼女の鼻先に、猫じゃらしのようにちらつかせてみた。だが、彼女はちよつとくすぐったそうなそぶりをしてだけで、相変わらず象のように熟睡している。

面白い。

私は調子に乗って、さらに彼女の首筋から肩にかけてのラインにはたきを這わせてみた。首筋をこそばして彼女が払いのければ次は頬に、頬も払いのければ次は鼻先にと、執拗に意地悪な動きを繰り返すうちに、さすがのヤイちゃんも、だんだん自分が何をされているか分かってきたらしく、布団の中から寝ぼけ混じりの不機嫌な声が聞こえてきた。

「もお、何すんの……」

彼女はそれでも、しばらくは夢から醒めきっていない様子で、気持よさそうに布団の上をゴロゴロと転がっていたが、だんだん意識がはつきりしてくると、「あつ！」とこつちがびつくりするような大声を上げ、布団から飛び起きたかと思うと、慌ただしく洗面所に駆け込んでいった。

「あつ、しまった！ 昨日、化粧したまま寝ちゃったよー！」

鏡を睨みながら叫ぶヤイちゃんの顔には、まるで世界が終わったかのような悲壮感が漂っている。私が「大丈夫やって、そんな大げさな」となだめても、全く耳に入っていない様子で、「サイアクー、

お肌が……」とか何とか呟きながら、バシャバシャと夢中で顔を洗い始めた。

やれやれ、朝はいつもこんな感じだ。

私たち三人は、この十畳ワンルームで同居を始めてもう半年になるが、一度だつて朝日を浴びながらトーストにコーヒーなんていう、爽やかな朝を迎えたためしがない。晩はたいがい二時や三時まで、お酒を飲むかビデオを観て夜更かしをし、お昼を過ぎた頃にやっと一人、二人と布団からのそのそと起きだしてくる。そんなことを繰り返しているうちに、昼夜逆転の生活がすっかり染みついてしまった。こんな風に私たちの生活が怠惰への一途をたどっているのは、三人が三人ともだらしないという性格的な要因とともに、誰も定職についていないために、仕事による時間の拘束が極端に少ないという、環境的な要因も大きいと思う。

私たちは三人とも、今年でもう二十七歳になるが、みんな揃いも揃って、金なし、職なし、男なしのトリプルパンチで、限られた若さと時間をいささか持て余しながら暮らしている。

みゆうは昼間はパチスロで小銭を稼ぎながら、夜は路上で自作の詩が入ったイラストを売るアーティストもどきで、一般職OLだったヤイちゃんは、勤めていた会社を辞め、失業保険でぬるゝいプー太郎生活を満喫中、私は漫画家を目指しながら、週に三、四日の喫茶店のバイトで収入を得るフリーター生活と、それぞれやっていることは違っているが、良識ある大人たちが見れば目くじらたてて怒りそうな、駄目な若者の典型であることに変わりはない。

そんな私たちがどうして一緒に住むことになったのかというと、話は八ヶ月前の美大の同窓会まで遡る。それまでは友達を通じて顔を知っている程度で、そんなに仲がいいというわけでもなかったのだが、近況を話し合っているうちに、お互い境遇が似ているもの同士意気投合し、どうせみんなお金がないんだったら、いつそのこと一緒に住んじゃう？ というノリになったのだ。最初のうちは飲み席での話だから、どうせ実現しないだろうと思っていたのだけれ

ど、一緒に部屋を見に行ったりしているうちに、どんどんその気になってゆき、いつの間にか部屋も決まり、引越し日も決まりと、ほとんど拍子に話が進んでいった。そして現在は家賃七万円のこの部屋を、光熱費も含めてすべて割り勘でシェアしている。友達と同居することについては、例えばこっちが寝ているのにテレビを消さないだとか、洗濯物の畳み方が汚いとかで我慢しないといけないことは多少はあるけれど、私は何をするにも安上がりで、いつも誰かがそばにいてくれるこの生活が、結構気に入っている。

「ただいまー」

そんなことをしているうちに、みゆうが大きなビニール袋を提げて、コンビニから帰ってきた。彼女は空き缶やラーメンのカップをちやぶ台の端に寄せると、空いたスペースにサンドイッチやおにぎり、ペットボトルのお茶などをどさつと広げ、私たち三人はテレビを見ながら遅い朝食をとった。

チャンネルを変えるとワイドショーがやっていて、そこでは「現代若者ファイル」などと題して、東京都内のぼろアパートで三人暮らしをするニートの生活が、親のインタビューなんかも交えながらドキュメンタリーで紹介されていた。スタジオではコメンテーターたちが「情けない、親が泣いている」とか「これからの日本は思いやられる」とか言って、鼻息を荒くしている。ありがちなTVプログラムだ。

こういうのを見ると、本当に私達って世の大人たちに嫌われているんだなあとつくづく思う。でも、犯罪者ならいざ知らず、善良な市民である私達が、どうしてこんな親でもない大人たちから、こんなにボロクソに言われなれないといけないんだろうか。

「やっぱうちらって、ちゃんと働いてる大人から見たらムカツク存在なんかな」

「またー、チハルはそうやってウジウジしたこと言って」

みゆうは私の杞憂をあっけらかんと笑い飛ばすと、コメンテーターたちの言葉などまるで意に介さないように、ズバツとこう言い放

った。

「働きたい人は働いて、働きたくない人は働かんで、それでいいやん。別にどっちが偉いとか、そんなんじゃないやろ。働かなくても生活していける環境があるっていうのも、生まれ持った才能の一つやと思うし」

「才能」という言葉をみゆうが使ったので、私は思わず吹き出してしまった。「それ、絶対言葉の使い方間違ってるって」、と私が笑って否定しても、彼女はそれを認めるどころか、逆に真顔でこう返してきた。

「何で？ 顔がきれいとか、頭がいいとか、そういうのと一緒やん、お金がある家に生まれてくるっていうのも。よく人間みな平等なんっていうけど、あれって私、絶対嘘やと思う。だって実際、美人とか不細工とか、貧乏とか金持ちとか、みんな生まれた時から何らかの差がついてるわけなんやから。結局、与えられたものをどううまく生かして、自分の納得する生き方をしていくかってことしかないわけやん？ で、私はきれいでも秀才でもないけど、絵と詩を描くのが好きで、なおかつ家が経済的にそんなに困っているわけでもないから、絵を描く時間を作るために、ちよつとぐらい親に援助してもらってどこが悪いっていうん？ そりゃ家が貧乏で食うに困ってるっていうんなら話は別やけどさ」

「はあ……」

みゆうのあまりに堂々とした主張に、私は返す言葉もなく口ごもってしまった。でも、私はみゆうのこういう、妙に開き直ったところが好きだ。理屈の通っていないことでも、彼女がその自信に満ちた口調で理路整然と説明すると、なぜか正しいことのように思えてしまうから不思議だ。確かにみゆうの意見には一理ある。私たちの生活は、裕福とまではいかなくとも、親がそこそこお金に余裕があるからこそ成り立っているわけで、もし片親とかでギリギリの生活だったら、こんな風にフラフラしているわけにはいかないだろう。そっぴい意味ではなるほど「生まれ持った才能」を享受していると

言えるのかもしれないけれど、私はみゆうのように、自分は自分、他人は他人と割り切って考えることができない。まっとうに働いてそれなりの収入を得ている同年代に対して、やっぱりどこかしら後ろめたさを拭いきれずにいるのだ。

「ごちそうさま」

一足先に朝食を終えたみゆうは、花柄の古着ワンピースにストライプのジャケット、オレンジのタイツにレース編みのニット帽という、彼女にしかできない個性的なコーディネートに着替えると、「画材のいっぱい詰まったトランクを持って、いつものように出かける準備を始めた。彼女はこうしてお昼過ぎに出かけていって、夕方までパチンコ屋に籠り、その後は梅田の大きな歩道橋の上で自作のアートを売るというのが、お決まりのパターンなのだ。

「じゃあね、行ってきます。九時ごろには戻ると思うから、ヨロシク」

彼女がいなくなった後、少し広くなった部屋には、私とヤイちゃん二人きりになった。

ふと見ると、ヤイちゃんはちゃぶ台に肘をついて、昨日の残りのスルメをつまみながら、始まったばかりの「ごきげんよう」を観て笑っている。彼女は毎日、ご飯を食べるかお風呂に入っている時以外は、ほとんどこうやってテレビの前に齧りついているんじゃないだろうか。よくまあ、大して変わりのないプログラムを、こう毎日飽きもせずに見続けていられるものだと思う。彼女にしてみれば、いずれ嫌でも働かないといけなくなるんだから、黙っていてもお金が入るこの時期くらいは、面倒くさいことは考えずにポーツとしていたいということなのだろうが、誰でもできる単調な仕事に追われて、若い時間を浪費するのは嫌だと言って会社を辞めたヤイちゃんは、皮肉なことに退職後の現在は、仕事よりもさらに単調な生活で、時間を浪費している。

私はそんな彼女を横目に見ながら、床に落ちていた描きかけの原稿を拾い上げ、ちゃぶ台で続きに取りかかり始めた。今やっている

のはネームと違って、大まかなコマ割りやセリフを鉛筆で描いていく、いわば下書きの下書きみたいな作業だ。

しかし、いつものことながら、ネームを描く私の筆は思うように進まなかった。頭で考えている時は、どんどんイメージーションが膨らんで、楽しくてしようがないのに、いざそれを紙に落としてみると、なぜか急にその展開が白々しく思えてきたり、設定に無理が生じてきたりして煮詰まってしまうのだ。そして今日も、私は数コマ進んだだけで行き詰まってしまい、続きが描けずにいた。

「何描いてるん？」

私が原稿の上で石のように固まったままでいると、いつもは興味なさそうにしているヤイちゃんが、珍しく声をかけてきた。

「うーん、SFものなんやけどね。宇宙飛行士の女の子が、ブラックホールに飲み込まれてタイムスリップして、自分のひいおじいちゃんに恋に落ちてしまうっていうストーリー」

「……へえ」

ヤイちゃんが苦しそうな表情で相槌を打った。口には出さなくとも「面白くなさそう」と顔に書いてある。

「でも、なかなか続きが思いつかなくて」

「ねえ、いつも思ってたんやけど、チイちゃんの描いてる漫画って、一体いつになったら完成するわけ？」

ズバツと痛いところを突かれた気がした。ヤイちゃんは普段はポイントとしてるくせに、時々ふいについて、ものすごいカウンターパンチを浴びせてくる。確かに彼女の言う通り、私は自慢じゃないがこの半年で、一度も原稿を完成させたことがなかった。いつも描いているうちに途中で断念してしまって、本当は漫画家を目指していると言いながら、どこかの新人賞に送ってみたことすらないのだ。

「え、そりゃ……、初めて描いてるから時間がかかるんやって！」

「えー、でもさ、大学の頃はCMの制作会社に入って、CMディレクターになってゆくゆくは映画を撮りたいとか言ってたくせに、次会った時は、やっぱり制作の現場は向いてないから脚本家になりたい

って言つて、一本も書かないうちに今度は漫画家でしょ？ チイちゃん、夢変わりすぎ。それってさー、もしかしてやってみると難しくて実現しそうにないから、他の夢に逃避してるだけなんとちゃうん？」

頭の中でカンカンカント、ノックアウトのゴングが鳴った。完璧なヤイちゃんのKO勝ち。でも、彼女にだけは「逃避」とか言われる筋合いはないと思うんだけど。

「よっ、余計なお世話っ！ 今度こそ本当に本当なんやから、水を差すようなこと言わないでよっ！ ヤイちゃんこそ、そんなテレビばっかり観てないで、資格の勉強でも始めたらどう？」

「んー、失業保険切れてから考えるわ」

人にはズバズバ言うくせに自分には甘いヤイちゃんは、私の反撃などものともせず、しれっとそう交すと、さつき起きたばかりだというのに、また布団の上でごろごろと寝っ転がり始めた。私はそんな彼女のことは無視して、原稿の続きに集中しようとしたが、前日のアルコールが残った頭では、やっぱりいいアイデアは浮かんでこない。そのうちに、なんだかこうやって机に向かっていること自体が途方もない時間の無駄のように思えてきて、私はおもむろにペンを置いた。

「あー、ヤイちゃんが変なこと言うから集中力切れちゃった。今日はやめ。ねえ、どっか出かけへん？」

そう言つて原稿を床に放り出した私に、ヤイちゃんの冷たい視線が突き刺さる。ちやぶ台の向こうから、「またあ？」という、気乗りのしない返事が聞こえてきた。

それからしばらくして、私たちは駅前の漫画喫茶に出かけた。

「出かけた」というよりも、「漫画喫茶ぐらいしか行くところがない」と言つた方が正しいのかも知れない。何せ、お金がない私たちが行ける場所は、ごく限られているのだ。だって、コーヒー一杯四百円はするこのご時世にあつて、一時間四百円程度で漫画や雑誌

が読めて、しかもドリンクまで飲み放題なんてところが、他にあるだろうか？ しかも、場所によっては、インターネットやDVDまで観られるところもあり、その気になれば千円程度で一日中でも時間を潰していられる。お金がなくて時間だけは持て余すほどある私たちにとって、漫画喫茶は何よりも貴重な存在なのだ。

玄関の扉を開けると、九月といってもまださんと照りつける陽射しが、蛍光灯に慣れきった私の脳を刺激して、一瞬目が眩んだ。平日の午後の住宅街には、まるでここだけ時間の流れを引き伸ばしたような、長閑な雰囲気漂っている。一軒家の前の路上では、五歳ぐらいの小さな男の子と、二十歳代前半ぐらいの若い母親がバトミントンをして遊んでいて、ポーン、ポーンとゆるやかに弧を描くシャトルを見ていたら、同じ時間帯、そう大して遠くない場所にコンクリートの箱に閉じ込められて、せわしなく働いているサラリーマンがいるなんてことが、とても信じられないくらいだ。時間に追われて過ごす彼らと、時間を持て余す私たち、一体どちらが幸せなんだろう。そんなことを考えながら住宅街を抜けていくと、いつの間にか駅前商店街の賑やかな喧騒が近づいてきた。

私たちが住んでいるのは、十三といって、大阪でも随一のピンク街として知られている場所だ。大阪の中心地・梅田からは電車で五分ほどのところにあり、飲食店や洋品店が建ち並ぶ商店街の周りには、キャバクラやファッションヘルスなどの風俗店がこれでもかというぐらいにひしめいている。そうかと思えば少し行くと、北野高校という関西屈指の進学校がぼつんと建っていたりして、まるで社会の明と暗をこった煮にしたような不思議な街なのだ、ここは。でも私はこのでたらめで、どこか胡散臭さの漂うこの街の雰囲気、なぜかあまり嫌いではない。

昼間のピンク街は、夜の賑わいに備えて仮眠でもしているかのよう、ひっそりと静まり返っていた。私たちはその中にぼつりと佇む、一軒の雑居ビルの中に入っていった。狭いエレベーターで二階まで上がると、「漫画喫茶 二十四時間」という看板が目の前に現

れ、入口でいつも見かける中年の店員が声をかけてきた。

「いらつしやいませ。毎度ありがとうございます」

彼は私たちを見ると、「今日もいつものコースでよろしかったですか？」とにこやかに尋ねてきた。私は漫画喫茶でこうやって店員に覚えられるのもどうなのだろう、と思いつながら、二時間の料金で三時間まで漫画が読み放題という「いつもの」三時間コースを選んだ。

店に入ると、早速、窓際の日当たりのいい席を陣取って、最新のファッション誌を読み耽るヤイちゃんをよそに、私は一人、本棚の間をぶらぶらとさまよっていた。まるで大きなドミノ倒しのように、狭い間隔で並んだ殺風景なスチール製の本棚には、少女漫画や少年漫画、カルトからアダルトに至るまで、あらゆるジャンルの漫画が、何万冊という単位でびっしりと並んでいる。しかし、それらに順に目を走らせていっても、私は興味をそえられる本を見つけることができずにいた。もしかしたら、あまりに通い詰めてしまったせいで、好きな本はあらかた読み尽くしてしまったのかもしれない。そう思うと私は我ながら、自分の暇人ぶりに呆れずにはいられなかった。

何となく手持ちぶさたになって、読書コーナーを見渡してみると、そこには平日の昼間にもかかわらず、ぽつりぽつりと客の姿があった。営業中にサボっているのか、スーツ姿のサラリーマン、いかにもオタクといった感じの、メガネででっぷりと太った男の人、黄色いジャージの上下を着たレディースヤンキー二人組、首にヘッドホンをぶら下げた、ひげ面の職業不明のお兄さん。みんな不思議と雰囲気似ている。与えられた時間の使い方戸惑っていて、ここにいる必然的な理由もないのに、他にいく場所もないから留まっているような、そんなふわふわとした感じ。私たちもきつと端から見たら、この雰囲気違和感なく溶け込んでいるんだろうなあと、ぼんやりと考えていると、隅に小学生らしい男の子が座っていて、私は思わず目を止めた。学校帰りだろうか、ランドセルを足元に置き、机の上に漫画を積み上げて、何やら一心不乱にペンを動かしている。

宿題でもしてるのかな。それにしても、こんなところで小学生を見かけるなんて珍しいな……。

私は何となくその小学生に興味を惹かれて、彼が座っている席に怪しまれないようにそうつと近づいていった。そして彼が熱心に書いているペンの先にあるものを、後ろからこっそり盗み見てみた。

そこに書かれていたのは、想像していたような数式や漢字の列ではなかった。机の上にあったのは、少年たちの間で人気の冒険漫画と、その開かれたページを、作者がもう一度描き直したかのような緻密さで、そっくりそのまま模写した白いノートだった。

私は目を見張った。もちろん絵の巧さが小学生とは思えないほど特出していたこともあるけれど、それよりも何よりも、彼があるシーンだけを抜き出して描くのではなく、コマ割りや背景もそのままで、ページを丸ごと描き写していることに驚かされたのだ。しかもそのスピードが半端ではなく、彼はロボットのように恐るべき速さで、ただの白いノートを漫画本のコピーへと変えていっていた。

「漫画描くの、好きなん？」

思わず後ろから声をかけていた。すると少年は、カリカリと規則的な動きを続けていた手をピタリと止め、鋭い目つきで私を見上げた。マシユマロのような白い肌に、能面のような無表情を張りつけたその顔は、どこか大人びていて陰りがある。彼は不機嫌に「別に」とだけ言うと、すぐにまた何事もなかったかのようにノートに視線を戻した。

「別について、そんなことないでしょ。そんなに一生懸命描いてんねんから。ねえ、その漫画何ていうんやっけ？ 確かテレビアニメでもやってた、『シン』とか何とか……」

すると少年が、私の言葉を遮るようにピシャリと言った。

「『シヴァ』だよ、『シヴァの大冒険』！ お姉さん、ちよつとうるさいんだけど！」

初めてまともに聞く少年の声は、思ったよりも明瞭で、はきはきとしていた。アクセントが標準語に近いので、どうやら関西の人間

ではないようだ。

「ごめん、ごめん。君みたいな小学生がこんなところにいるなんて珍しくて、つい気になって。でもさあ、どうしてこんな風にページ丸ごと写してるん？ 面倒くさくない？」

「別に。だってこうした方が時間が稼げるから」
「時間を稼ぐってどういうこと？」

私は少年の言葉の意味を計りかねて尋ねた。しかし、彼はこんなお喋りをしていても時間の無駄だとも言わんばかりに、押し黙ったまま何も答えてはくれようとはしなかった。

「実はお姉さんも、漫画描くの好きなんやけどね……」

私は仕方なく、話を他のことに反らそうとペンを取り、ノートの端に自分の漫画に出てくる主人公の絵を描いてみた。すると意外にも、彼はそれを見て、いきなり甲高い声を上げて笑い始めた。

「アハハ、お姉さん、下手だなあ。これなら僕の方がよっぽど上手いよ」

私は少年の、何の遠慮もない笑いにムツとした。だが、ムツとすると同時にホツとした。少年の顔からは先ほどまでどこかしら漂っていた陰影の色が消え、年相応の幼さと明るさが戻っていたからだ。
「何よ、そんなに笑うんなら、あんたも何か描いてみなさいよ」

すると彼は「仕方ないなあ」ともつたいをつけながら、腕時計の液晶画面をストップウォッチに切り替えると、「ちよつと見ててよ」と言ってこっちに目配せをし、スタートボタンを押して、いきなり猛烈なスピードで漫画を写し始めた。彼は百分の一秒単位でめまぐるしく時を刻むストップウォッチを追い抜こうとでもするかのようになり、ぐんぐんノートを描き進めていき、あっという間に一ページを写し終えると、二分〇四秒三五と表示された液晶画面を、「どう？」と得意気に私に示して見せた。

「今は二分ちよつと超えちゃったけど、調子のいい時は一分台で描けることもあるよ。こんなに線がいっぱいあるのに、それだけの時間で描けるなんてすごくない？」

「はあ……」

私は呆気にとられて、何も言うことができなかつた。この少年は少し変わっているという最初の印象は、ますます強くなった。「時間」「記録」「速度」、彼の言葉は、常にそういう目に見えるもののみで構成されていて、彼自身の考え方や好き嫌いといった人間らしい部分も、全く透けて見えてこないのだ。それは彼の能面のような表情にも言えることで、私はこの少年は一体どんな時に人間らしい側面を覗かせるのだろうか、訝しがりずにはいられなかつた。少年は、私が感心するでもなく褒めるでもなくぼかんとしている。と、不満そうに口を尖らせた。

「何だよ、そっちが描けつていうから描いてやったのに……」

「うーん、でも何か……」

私は自分が感じた違和感を、できるだけ正確に表現できる言葉を探した。

「何か、フェアじゃないような気がするんだよね」

「フェアじゃないって？」

「だって、君のは他の人のコピーじゃん？ それで『どう、すごいでしょ』って言われても、なんか納得できへんのよね」

「……じゃあ、どうすれば納得するわけ？」

「なんか、自分で考えたキャラクターとか描いてみてよ。それで私より上手かったら、納得する」

そう言うと、少年は今までの自信満々な態度が一転して、急に逃げ腰になった。

「嫌だ。そっちが勝手に声をかけてきたくせに、何でそんなことしなくちゃならないんだよ」

「いいじゃん、別に。そんなに自信があるんやったら、自分の絵を描くのだって簡単なことやる？」

しかし、少年の態度は頑なだった。私が何を言っても、「とにかく、嫌だったら嫌なんだ」の一点張り、絶対に自分の絵を描こうとはしない。私はさっきまで自分の絵の腕を誇示していた彼が、ど

うしてこんなに態度が豹変してしまったのか不思議に思った。そしてふと、ある考えが思い浮かんだ。

「……あ、分かった。自信がないんやろ？」

「え？」

「人の絵は上手く描けるけど、自分の絵は下手なんやろ？ それで自信がないから、見せたくないとか言っただけで、突っ張ってるんやろ？」

「ち、違うよ！」

しかし否定しながらも、少年の顔は上気して真っ赤になっていた。目は口ほどにものを言うというけれど、今、彼の顔は本当に雄弁に全てを物語っていて、私は一目で自分が言ったことが凶星だったと確信した。

「あ、ごめん。ほんとやっただんや」

さっきの仕返しのように意地悪く言っただけで、少年はさらに興奮して声を荒げた。

「もう、うるさいな！ お姉さんのせいで手が止まっちゃったじゃないか。早くどっか行ってよ」

彼は最後の砦に逃げ込むかのようにノートに視線を戻すと、シツ、シツと、人を病原菌みたいに手で追い払う仕草をした。それからは何を言っても無駄だった。少年は私の言葉どころか存在すら目に入っていないみたいで、ノートに視線を戻して無視を決め込んだのだ。私は仕方なく「はいはい、ごめんね、邪魔して」と言っただけで、その場を離れることにした。途中で振り返ると、少年はもう何事もなかったかのように、再び漫画の模写に没頭していて、その姿は他の客と同じように、周りにたくさんの人がいるのに、どこか人を寄せつけないような、孤独なバリアを張り巡らせているように見えた。

「お帰り、遅かったね」

席に戻ると、ヤイちゃんも何も持たずに帰ってきた私を見て、不思議そうに首を傾げた。

「あれ、読む本探しに行つたんじゃないの？」

「ちよつとね、さつき面白い子供見つけちゃって」

「子供？」

「うん、それがさー」

私がヤイちゃんに少年のことを説明しようとした、その時だった。カウンターの方から、厳しい口調で怒鳴る店員の声が聞こえてきて、私は思わず口をつぐんだ。

「ちよつと、僕、黙ってたら分からないだろ。早くお父さんかお母さんの連絡先を教えなさい！」

カウンターを見ると、何と店員が怒鳴りつけている相手は、さつき話したあの少年だった。彼は自分よりも頭二つ分くらい背丈のある店員の目を、臆することなくじつと睨みつけたまま、だんまりを決め込んでいた。

「あのね、こつちだつて我慢の限界があるんだよ。いつまでもそうやって黙つたままんなら、警察に連絡してもいいんだよ！」

店員の脅すような言葉に耐えられなくなった私は、思わず立ち上がった、カウンターのの方に歩み寄っていった。「ちよつと、やめときなつて」と止めるヤイちゃんを振り切り、「あの、すみません」と二人の間に割つて入ると、突然の部外者の出現に、店員は訝しげな顔で私を睨んだ。

「この男の子のお知り合いの方ですか？」

「いや、知り合いつていうか……、あの、何かあつたんですか？」

すると、店員はさもこちらが被害者であるというような、媚びた口調で、

「いやね、会計したらこの子が、財布の中に百円しか入ってないつて言うもんでね。こつちも商売ですから、お金を貰わないと帰すわけにいかないんで、家の電話番号教えなさいつて言ってるんですけど、さつきからこんな感じで黙つたまんまで。ほとほと困ってるんですよ」

と言つて肩をすくめた。

少年の方に目を移すと、きまりが悪そうにポケットに手をつつ込んで俯いたまま、こちらと目を合わせようとしない。どうやら予想に反して彼は、私の出現をあまり快く思っていないようだった。

私は困ってしまった。今さら私には関係ないことだと引き下がらるわけにもいかないし、店員は「しゃしゃり出てきたんだから、お前が何とかしろよ」と言わんばかりの目でこちらを睨んでいる。

私は仕方なく「分かりました。じゃあ私が代わりに払います」と言って、ポケットから財布を取り出した。

「あ、そうですか。すみませんねえ」

店員はそうと分かると、打って変わった調子のいい態度になり、「坊や、よかつたな」と言って少年の頭を撫でた。私はその豹変ぶりに半ば呆れながらも、財布を開けて小銭を準備しようとした。だが、店員から告げられたのは、思わず目を丸くしてしまうような予想外の金額だった。

「じゃあ、二千四百円です」

「二千四百円!？」

どうせ数百円のことだろうと高を括っていた私は、思わず声が上ずってしまった。この店は最初の一時間は四百円で、そのあと三分の延長ごとに、二百円ずつ加算されていく仕組みなので、二千四百円といえば、計六時間もいたことになる。今は四時過ぎだから、彼は午前中から学校にも行かずに、ここで黙々と模写をして過ごしていたのだろうか？ ふと、さっき少年が話した「時間を稼ぐ」という言葉が脳裏をかすめた。

私はおそろおそろ、財布の中身を確認してみた。思ったとおり、中には千円札が三枚しか入っていない。しかもこれは、私が今日から一週間食べていくための大切な生活費なのだ。だけど、今さらお金がないから払えませんかなんてみっともなく言えるはずもなく、渋々、私は身を切るような思いで、その全財産をレジのトレーに叩きつけた。もうこうなりやヤケだ、持ってけドロボー!

「ありがとうございます」

私はチンというレジの音とともに差し出されたおつりの六百円を、やけくそのように財布の中に投げ入れた。財布の中で小銭がチャリチャリと虚しい音を立てる。頭の中で、まるで漫画の世界のようにお札に羽が生えて、遙か彼方に飛んでゆく映像が浮かんだ。これから一週間どうしよう……。バイト代が入るまで、おかずも買えない切りつめた生活のことを思うと、私の心の中ではすでに、出すぎた真似をしたことに対する後悔が芽生え始めていた。

「お金を払ってもらったからって、お礼なんか言わないからな。だいたい頼んでもいないのに、何でしゃしゃり出てくるんだよ」

店を出るなり、少年はそう言っただけで私に毒づいた。思わず、握っていた私の拳に力が入る。せっかく助けてやったのに、なんてかわいくないんだろ。つい、さっきの支払いは取り消して、二千四百円を取り返してきてやるうかと、あらぬ思いが脳裏をよぎる。

「あつ、そう。悪かったわね、出すぎた真似して。じゃ、さよなら。もう二度と困っても声なんてかけないから」

私は沸き上がってくる怒りを懸命にこらえながら、できるだけ平静を装ってそう言い返すと、くるりと踵を返して店に戻ろうとした。だがその時、思いがけず「ちよつと待って」と少年に呼び止められて、私は振り返った。

「お金、返すよ。ないと困るんでしょ、お姉さん」

少年は相変わらず舐めたような目つきで私を見上げると、「だって、さっきお札を出すお姉さんの手、震えてたもんね」と意地悪く付け加えた。

私は助けてやった相手から馬鹿にされることに屈辱を感じながらも、お金が返ってくるという言葉につられて、つい「え、返してくれるの?」と、低姿勢で少年ににじり寄った。

少年はちらりと私を横目に見ながら、「ああ、いいよ」と借りがあるとは思えないほど横柄な態度で返事をした。

「僕、家がこのすぐ近くなんだ。だから兄さんに言ったら、お金を

持ってきてくれると思う」

そう言うと、少年はポケットから携帯を取り出し、自宅らしき番号に電話をかけた。そして、その兄らしき人と何やら会話を交わして、このビルの下に来てもらうようさっさと話をまとめてしまった。電話が終わると、少年は私に向かって「うまくいった」というように、親指と人指し指で小さな丸を作って見せた。

「よかった。兄さん、家にいたよ。今から二十分ぐらいで、こっちに来るって」

私たちは心配して外に出てきてくれたヤイちゃんも含めて、三人で雑居ビルの下で少年の兄を待った。外はもう夕方に近く、強い西日が辺りの景色を黄金色に染めている。周りの雑居ビルや電信柱は切り絵のように長い影法師を落とし、少年を真ん中に挟んで立つ私達の影も長く伸びて川の字のようになっていた。そこに、ぽつぽつと灯り始めたピンク街の派手なネオンの明かりが色を差す。

その時ふと、右腕に重力を感じて隣を見ると、少年が私の袖を掴んで、何か言いたげな目でこちらを見つめていた。

「何？」

「あのお、今日ここで僕に会ったこと、兄さんには言わないでほしいんだ」

「いいけど、何で？」

すると、少年はモジモジと落ち着きなく体を揺すりながら、小さな声でぼそりと呟いた。

「……僕、学校行ってないんだ」

私はどう言っているかわからず、ただ、「……そう」と曖昧に相槌を打った。頭の中で、さっき少年が頑なにレジでだんまりを通していたことと、出会った時に彼が言った「時間を稼ぐ」という言葉が、一本の線で繋がった気がした。おそらく、少年は家族の誰にも話していないのだろう。自分が学校に行かずに、ここで黙々と時間を過ごしていることを。

「いい？ 約束だよ」

少年が袖を掴む手に力を込めて、再び念を押しした。緊張のために引きつった顔には、先ほど店の中で見かけたのと同じ暗い影が差している。それを見ていると、誰にも言えない秘密を一人で抱え込んでいる彼が無性にかわいそうに思えてきて、私は「分かった」と、彼の目を見て大きく頷いた。すると、少年はやつと安心したように、私の袖から手を離れた。

しばらくして、やって来た少年の兄という人は、思ったよりも大人だった。「ああ、ごめん、遅くなって」と言いながら、小走りに駆けてきたその人は、私たちと同じか、下だとしてもせいぜい一歳か二歳ぐらいしか変わらないように思われた。人気のスポーツブランドのスウェットに、ぶかぶかのジーンズを履き、目深に被ったニット帽の下から、肩ぐらいまでの長髪が覗いている。どこからどう見てもフリーターといった風貌だが、それにしても、ずいぶん歳の離れた兄弟だなと思った。

「兄さん、遅いよ」

「ごめん、ごめん。ちょっと場所探しちゃってな。ところでこの人たちは？」

彼が私とヤイちゃんを交互に見ながら訊くと、少年はあらかじめ言うことを考えていたかのように、学校帰りに塾で使う参考書を買いに本屋に寄ったら、レジでお金が足りないことに気付き、困っているとこのお姉さんたちが親切にお金を貸してくれたんだよと、淀みない口調で説明した。

私たちは顔色ひとつ変えずにすらすらと嘘を並べたてる少年を、呆気にとられた表情で眺めていた。少年の兄は「そうなのか」と疑う様子もなくあっさり納得すると、ジーンズのポケットから財布を取り出し、そこから千円札を三枚取り出して私に渡してくれた。

「お釣りはいいです」

彼の財布を見ると、それが高価なブランドのもので、中身も分厚く膨らんでいたの、私は少し意外な感じがした。

それから彼は「あ、僕こういう者です」と言って、自己紹介代わ

りに私たちに名刺を渡してくれた。普通とは反対に、黒がベースになったそのおしゃれな名刺には、白いゴシック体の文字で「デザイナー 鳥井てつじ」と書いてあった。

「すごい。デザイナーさんなんですか？」

「ええ、そうなんです。フリーでフライヤーとかパンフレットのデザイナーなんかを手がけてまして。あ、こいつは弟の勇気です。どうもこの度は弟がご迷惑をおかけしまして」

てつじさんは勇気の頭を押さえて強引におじぎをさせると、自分も丁寧に頭を下げた。彼はそのプー太郎風の外見とは裏腹に、けっこう礼儀正しい人のようだ。

「ずいぶん歳が離れてるんですね」

「あ、それよく言われます。僕が二十六でこいつが十歳だから、十六歳差かな。でも異母兄弟とかじゃないですよ。ハハハ」

てつじさんは顎に生えた不精髭を撫でながら、豪快に笑った。彼は同じ兄弟でもしかめっ面の弟とは違って、物腰も柔らかくてとつきやすい人だった。話すたびに、そのワイルドな風貌が笑顔でくしゃっと崩れ、人のいいお兄さんの素顔があらわになる。しかし、彼はそうやって初対面の人もすぐ仲良くなれる親しみやすさを持ちながらも、相手にずうずうしいと感じさせない、適度な距離感を保つことも忘れない人だった。訊くと、彼はこの年齢ですでにキャリアは六年で、大阪のデザイン会社で五年間働いた後、一念発起して今のマンションに一人で事務所を構えたらしい。年齢以上の落ち着きと人当たりの良さは、こういう何の後盾もなしに、一人で社会と対峙している経験から来るのかもしれない。いずれにせよ、彼はみゆうやヤイちゃんといった、私の周りにいる人たちとは全く違った雰囲気をもった人だった。

「じゃあ、よかつたら事務所にも遊びに来て下さいよ。あんまり仕事もなく暇ですから」

てつじさんは、そんな見えすいた謙遜を口走りながら、私たちに手を振って、勇気を連れて商店街の向こうにあるマンションへと帰

つていった。遠ざかる二人の後ろ姿は親子ほど身長差があり、夕日を受けて伸びる長短二本の影は、歩く度にリズムを打って左右に小さく揺れている。ふと、もうこの二人とは二度と会うことはないんだろうなと思うと、自分でも思いがけないセンチな感情が胸に迫ってきた。

だがその時、視界の中で小さくなりかけていたてつじさんが、踵を返してこちらに戻ってきたので、私は驚いた。彼は駆け足で私たちの前までやって来ると、息を切らしながら、私にこう耳打ちをしてきた。

「勇気、本当はあの漫画喫茶にいたんでしょ？ これ、迷惑かけたほんのお詫びです」

そう言うとしてつじさんは、ポケットからリボンで飾られた、ハンカチのような紙の包みを取り出して、私の手に握らせた。そしてまた駆け足で勇気のところに戻ると、今度こそ本当に、二人で商店街の奥へと去っていった。

その場に取り残されたヤイちゃんと私は、何がなんだか状況がよく飲み込めないまま、呆然とそこに立ち尽くしていた。ただ一つ分かったのは、てつじさんは勇気が学校に行っていないことを知らないのではなくて、知っているけれど知らないふりをしている、ということだった。ここに来るのが遅くなったのも、本当は場所を探していたのではなく、私に渡したこの包みを買っていたからなのかもしれない。

いつの間にか、太陽はすっかり西に落ちて、辺りは紺色のフィルムターがかかったように薄暗くなり、ピンク街のネオンはますます毒々しさを際立たせていた。私はもらった包みを握りしめたまま、二度と会うことのないであろう兄弟の秘密を思っ、二人が去っていた後のアーケードをぼんやりと眺めていた。

第二章

しかし、私たちとてつじさんは、それから一ヶ月ほど経った十月のある夕方、思いがけないところで再会を果たすことになった。

その日、バイトもなく暇だった私とヤイちゃんは、会社帰りのサラリーマンや若者たちが行き交う、梅田のスクランブル交差点の大きな陸橋で、みゆうの露店の店番を手伝っていた。

陸橋の上は、思い思いのパフォーマンズを行う若者たちで溢れており、さながら売れないアーティストたちの展示場のような感じだった。目の前では、なんちゃってゆずみたいな二人組がアコースティックギターを抱えて自作の曲を歌い、その少し向こうでは、風船アーティストがミツキーやプードルを作って、カップルや親子連れを沸かせている。そのまた向こうでは、女の子二人組が、ビーズを使った手作りアクセサリーをダンボールの上に広げ、そのさらに奥では、全身を緑色にペイントし、人形のように静止したパフォーマーの周りに、たくさんの人が群がっていた。

みゆうはその一画で、路上に敷物を敷き、アクリル絵の具で描いた絵に詩が添えられた、手作りのポストカードやポスターを並べていた。

彼女の作品は、彼女の分身として描かれる黄色いうさぎが、日頃考えていることを詩のスタイルで独白していくという、ユニークな連作もので、中でも私は「他人から押しつけられた／自分らしさに縛られて／わたしは自分を／見失いたくはない」という詩が特に気に入っている。確かにそこに綴られた言葉は、彼女の性格を現すように、ストレートすぎるほどストレートで、今さら何をとと思うほど、分かりきったことばかりかもしれない。でも、みゆうの作品には、どこか人を惹きつける不思議な魅力があると、私は思う。出口が見つからないような、心の迷路に迷い込んだ時、その透明感のあるイラストと率直な言葉に出会うと、今まで悩んでいたことが何でもな

いこのように思えてきて、前向きな気分になれる。だけど残念なことに、なんちゃってアーティストなんて吐いて捨てるほどいるこの世の中には、彼女の才能に気付いてくれる人間が、あまりにも少ないのだ。だから彼女は未だに、この梅田のせせこましい路上から、羽ばたき出せずにくすぶっている。

歩道橋を行き交う人々は、みな家路を急いでいるのか、足元の作品には見向きもせず、足早に店の前を通りすぎていつていた。私とヤイちゃんはそんな人の流れを、溜息混じりに眺めていた。今日も何の収穫もないかもしれない……。そう思って諦めかけた時、店の前を通り過ぎていったチノパン姿の人影が、少し行ったところで引き返してきて、私たちの前でピタリと止まったので、私は驚いて顔を上げた。見ると、ストリート系のファッションに身を包んだ若い男の人が、しゃがんで私たちの顔を下から覗き込んでいる。彼は何か思い出せそうで思い出せないような、もどかしい表情で首を捻っていた。

「あの、もしかして、この間、駅前の商店街でお会いした……」

彼がおそろおそろ言うのと同時に、ちょうど私にも一ヶ月前の記憶が甦ってきた。

「あつ、この間の漫画喫茶の！」

思わず大きな声で叫ぶと、男の人は「そうそう！」と頷き、見覚えのあるくしゃっとした笑顔をこちらに向けた。彼は一ヶ月前に漫画喫茶で出会った、あのでつじさんだったのだ。彼はその日も、一度会っただけの相手とは思えないほどフレンドリーに、私たちに話しかけてくれた。

「久しぶりですね、この間はどうも。いやあ、でも偶然だなあ、こんなところでまた会えるなんて」

「ほんとですよ。あ、あの時はハンカチありがとうございました。ところで今日はお仕事ですか？」

「ええ、ちよつと打ち合わせで。でも、もう終わったんです」
てつじさんはそう言うと、手に持ったキャリーケースをポンポン

と叩いた。すると、一人事情を知らないみゆうが、不思議そうな顔をして「知り合い？」と尋ねてきた。

「あ、この人さ、前に話してた兄弟のお兄さんで、鳥井てつじさん。それでこっちが友人の倉田みゆうです」

「あ、どうも鳥井です、よろしく」

てつじさんは、この間、私たちにしたのと同じように、彼女にも礼儀正しく頭を下げると、足元に並んだポストカードを手に取って、「これ、全部倉田さんが描いたんですか？」と尋ねてきた。

「ええ、そうですけど」

「へえ、すごいな。今流行りの路上アーティストってやつだ」

「別に流行ってるからやってるんじゃないかもしれませんよ。好きだからやってるんです」

みゆうはムツとして言い返した。どうやら彼女はそのへんのミィーハーと一緒にされたと思っで、気を悪くしてしまっただようだ。こいういう時、本当に彼女はその場の状況を見て合わせる柔軟性がないから困る。おかげで、その場の空気が急に気まずくなっってしまった。てつじさんはすっかり萎縮してしまっで、次の言葉を考えあぐねるかのようにな、目を宙に泳がせている。

「そ、そういえば、てつじさんってポスターとかを作ってるデザイナーさんらしいよ」

私は慌てて横からフォローを入れた。すると、「デザイン」という言葉に反応したのか、彼女は少し態度を和らげで、「そうなの？」と興味を示すように身を乗り出してきた。

「仕事だけじゃなくって、趣味でアートの真似事なんかもしてますよ。だから倉田さんの作品に興味を持ったんだけど、ちょっと言い方が悪くて、誤解されちゃったみたいですね」

てつじさんはきまり悪そうに頭を掻くと、その場の空気を変えるように、パツと表情を明るくしてこんな提案をした。

「あ、そうだ。もしよかったら、これからうちに見に来ませんか？この間のお礼もしたいと思っでいたし。それでその後、みんな

で好み焼きパーティーでもしましょうよ」

「えー、いいんですか？」

「どうぞ、どうぞ。どうせ今日はもう仕事もないし。いつも勇気と二人で寂しい食卓だから、女の子が三人も入ってくれたら、華やかでいいですよ」

てつじさんの思いもかけない誘いに、私たちはにわかに沸きたった。だが、その時、向かいで彼がヤイちゃんに熱っぽい視線を送っているのを、私は見逃さなかった。そこには私やみゆうを見る時とは違う種類の優しさと、微かな色気が含まれていて、私は思わずやりとってしまった。家に誘ったのは、てつきりみゆうに気を遣ったのだと思っていたけれど、目的はどうやらそれだけではなさそうだった。

しかし、肝心のヤイちゃんとはいえば、「わーい、私、好み焼き大好きなんだよねー」と無邪気にはしゃぐばかりで、そのことに全く気付いている様子はなかった。

てつじさんの自宅は、十三駅から十分ほど歩いたところにある、外観が打ちっぱなしのこじやれたマンションの十一階にあった。エントランスをくぐると、吹き抜けになった開放的なロビーが広がり、外壁と同じ打ちっぱなしの壁に施された間接照明が、マンションというよりはどこかのバーのような大人びた雰囲気を出している。てつじさんはエレベーターで上に昇ると、シックな黒色のドアが連なる見渡しのいい廊下を進み、その一番奥にある扉を開けた。

「散らかってるけど、どうぞ」

てつじさんはそう言ったが、私はこれほどまでに片付いていて、しかも統一感のある部屋を見たのは、これが初めてだった。玄関を入ってすぐに広がる、十二畳のLDKは、中央の大きなソファセツトやビーンズ型のダイニングテーブル、仕事用のパソコンラックやそのほか小さなアイテム至るまで、すべてモノトーンで統一されていて、まるで雑誌かパンフレットから抜け出してきたようだ。その

先に伸びる廊下の両脇には、勇気とてつじさん、それぞれの部屋があり、このマンションは現在、兄弟だけの二人暮らしだということだった。

「勇気ももうすぐ帰って来ると思うから、ちょっと待ってて下さいね」

てつじさんはソファで待つ私たちのために、コーヒーを入れてきてくれた。私はそれを飲みながら、壁に飾られた数枚の不思議なアート作品に目を奪われていた。おそらくこれがてつじさんの言っていた、趣味でやっているというアートの真似事なのだろう。パソコンで描かれたそれらの作品は、絵というよりは、万華鏡を覗いたような極彩色の幾何学模様で、よく見ると、一つひとつの模様は数字やアルファベットなど、無数の記号が集まってできている。タイトルの付けられていない、それらのランダムな記号の集合体は、見方によっては花のようにも、人の顔のようにも見えた。

「何だか不思議な絵ですね。これって全部、てつじさんが描いたんですか？」

隣で私と同じように、壁のアート作品に見入っていたみゆうが尋ねた。すると、てつじさんは「ええ、まあ」と、照れくさそうに頷いた。

「仕事でパソコンを使ってるから、その延長って感じで、倉田さんみたいな手描きのものとはだいぶ質が違いますけど。こういうデジタルアートって興味ありますか？」

頷きながらも私が、「あ、でも正直、何が描いてあるのかはよく分からないです」と言うと、てつじさんはハハハと笑って、「じつは描いた僕もよく分かってないんですよ」と頭を掻いた。

「でも、何も意味がないっていうのも、一つの意味じゃないかと思うんですけどね、僕は。つまり、観る人の価値観によって、百人いれば百通りの見方ができる、そういう絵があってもいいんじゃないかと思うんです。だって、例えば誰が見ても花と分かるものを描いたんなら、観た人は『ああ、きれいな花だ』で終わってしまうけれ

ど、普段伝達手段としてしか使われていない記号をこんな風に絵のように配置したら、みんな何に見えるか考えて、いろいろ想像が膨らむでしょ？ 紙の上じゃなくて、観た人の頭の中で、作品のイメージが完成するんです。それって、面白いことだと思いませんか？」

するとてつじさんは、壁にかけられた作品の一つを指差して、私たちに「あれは何に見えます？」と尋ねてきた。それは、黄色やベージュ、茶色の記号が、一枚の紙の中で不規則に混ざり合った幾何学模様で、ヤイちゃんがそれを見て、「私、あれサファリパークにいる動物に見えるな。5がキリンでさ、横になった3がチータ」と言うと、みゆうは「えー、あれは秋になって落葉した公園のいちようやる」と反論し、私はその隣で「オーブンに入れる前の型抜きしたクッキーに似てる」と感想を洩らした。

「ほらね？」

てつじさんは私たちの答えを聞いて、いたずらっぽく笑いかけた。「たったこれだけの人数でも、もうこんな風に意見が分かれるですよ？ 要は会話と同じで、アートもコミュニケーションなんですよ。固定した価値観を一方的に与えられるんじゃなくて、人と作品が出会って、そこから生まれる偶発的な感情によって、初めて作品が完成するんです。まあ、こういう考え方は、僕のオリジナルじゃなくて、ずっと昔からいろんな人が言っていることなんですけどね」

てつじさんの話は、進むにしたがって専門的になってゆき、コンセプトチュアルアートとか、パフォーマンスアートとか、耳慣れない言葉が頻出する頃になると、私とヤイちゃんはすっかりちんぷんかんぷんになっていた。

だが、そんな中でみゆうだけは、てつじさんの説明に熱心に耳を傾けていた。彼女はどんどん熱が込もって観念的になっていく話題に一生懸命ついていき、彼から何かを吸収しようとするように、いろいろと難しい質問を投げかけていた。

それは私が初めて見る彼女の一面だった。いつもみゆうは自分の意志をしっかりと持っているけれど、その代わりに人の意見を素直に

聞き入れない頑固なところもあって、こんな風に自分から人の意見を求めるなんて珍しいことだった。どうやら彼女はてつじさんと話しているうちに、その作品や考え方に強く影響されて、眠っていたアーティストの血がにわかには沸きたち始めたようだ。でも、それを横目に見ながら、私は今まで味わったことのないような焦燥感が湧き上がってくるのを感じていた。彼女がてつじさんと私の知らない話題で盛り上がるのを見るたび、私はみゆうの存在が急に遠くなつたような気がして仕方がなかった。

だが、ちょうどその時、ふいにガチャリと音がして、玄関の扉が開いた。勇気が帰ってきたのだった。彼はリビングの私たちに気付くと、「あれ？」と驚いた顔をして、無言で問いかけるようにてつじさんに視線を送った。

「お帰り、勇気。憶えてるか？ この間、駅でお金を貸してくれたお姉さんたちだよ」

「憶えてるよ。でも、何でここにいるの？」

「梅田の陸橋で偶然会ったんだよ。それで、この間はちゃんとお礼もできなかったから、夕食に誘った。今日はみんなでお好み焼きパーティーだよ」

「へえ、賑やかで嬉しいな」

しかし、勇気の表情は言葉とは裏腹に、それほど嬉しそうではなかった。一ヶ月ぶりに再会したというのに、彼は何の感慨もあらわすことなく、ランドセルを床に乱暴に放り出すと、ふーっと深く溜息をついて、リビングのソファにもたれかかった。瞼を閉じて今にも眠り出しそうなその顔は、ひどく疲れているように見える。彼は今日も学校にも行かずに、あの漫画喫茶の片隅で黙々と時間を潰していたのだろうか。ふと、そんな思いが脳裏をよぎった。

私はさつきてつじさんが言っていた、アートとコミュニケーションの話の思い出していた。てつじさんの作品が「コミュニケーションするアート」なら、勇気のはいわば「一切のコミュニケーションを排除したアート」だろう。彼の創作活動はたった一人でひっそり

と行われ、誰の目にも触れることもなく自己完結してゆく。途方もない時間と労力をかけながら、何も「創り出さない」その果てしない作業の先には、いったい何があるのだろうか。ひよっとしたらそこには、虚無感と疲労感の砂漠ばかりが広がっているのかもしれない。そう思うと、少し切ない気持ちになった。

「じゃあ、俺はこの人たちに手伝ってもらって準備しとくから、お前は宿題とかあるんだったら、その間にさっさと済ませてこいよ」「分かった」

勇気はおもむろに腰を上げ、兄の顔をチラリと見やると、冷やかにすよんに言った。

「すごいね、兄さん」

「何が？」

「両手に花じゃない」

「だろ？ 両手じゃ持ちきれないよ」

てつじさんは勇気の方を向いて、ニツと歯を見せて笑った。

その軽快なやりとりを見ている限り、二人は仲の良い兄弟そのものように思える。しかし二人は、お互いがお互いに言えない秘密を持っているのだ。学校に行っていないことを兄に内緒にしている弟と、それを知っているのに知らないふりをしている兄。そして、たった一度しか会ったことがないのに、双方の秘密を知ってしまった、第三者の私。

そういう色眼鏡で見ると、てつじさんが弟にかける優しい言葉や、勇気が兄に向かって投げかける冗談も、どこか空々しく響くような気がして仕方がなかった。ランドセルを引きずりながら部屋へ引っ込んでゆく勇気の背中が、どこか疲れて見えるのでさえ、嘘のプレッシャーに耐える苦痛のせいなのではないかと、勘ぐってしまいたくなるほどだった。

それから私たちは早速、台所でお好み焼きの準備を始めた。役割分担は、自然にというか必然的に振り分けられていった。てつじさ

んがキャベツを刻み、私が生地を作り、みゆうが烏賊や海老などのトッピングを準備し、ヤイちゃんが食器を用意する。最初、「やっぱり包丁を使うことは女の子にやってもらわないとね」と言って、てつじさんは私たちに包丁を握らせていたのだが、そのあまりの危なっかしさに見ていられなくなり、「やっぱり、こっちは僕がやりますよ」と交代して、自分でキャベツを刻み始めたのだった。

てつじさんの包丁さばきは料理人のように正確で、次々とまな板の上に積もってゆく千切りキャベツは、まるで機械で切ったかのようになり、大きさが揃っていた。私たちがそれを見てほっと感心していると、てつじさんは「いや、勇気と二人暮らしだと、やっぱりご飯作るの俺の役割になりますから」と、照れくさそうに言った。

「なんかてつじさんって、勇気のお父さんみたいですよ」

私は今まで二人を見て感じていたことを、思い切って口に出してみた。すると、てつじさんは「はは、そうかもね」と言って、はにかむように笑った。

「まあ、確かに歳が離れてるから、昔から僕があいつを守ってやらなきゃってという意識は、普通の兄弟より強いかもしれませぬ。実際、今は親父がいないから、僕が父親代わりでもあるし」

「え？」

生地をかき混ぜていた私の手が、一瞬止まった。「どういうことですか？」と、おそろおそろ訊く声が、緊張で震えた。

「実は、半年前に両親が事故で亡くなったんです。僕は実家が長野でしてね。勇気は両親とずっとそっちに住んでたんですけど、事故があつてから、こっちに越してきたんです。だからあいつ、まだアケセントが大阪弁っぽくないでしょ？」

最後に大阪弁の話題を出して茶化したのは、辛気くさくさなうちはならないという、てつじさんの配慮だろう。でも、だからといって「ハハハ、そうですね」と、笑う気にはなれなかった。

「すいません、何か余計なこと訊いてしまいました」

「いや、全然いいですよ。でも両親が亡くなって、一番かわいそ

うなのは勇気なんです。まだ甘えたいさかりの年頃なのに、寄りかかれる人間を一度に二人も失ったんですから。その上、友達とも離れてこんな慣れない土地で暮らすことになるなんて、本当に不憫ですよ」

私はあの生意気そのものに見えた勇気に、そんな辛い過去があったと知って驚いた。もしかしたら彼が学校に行っていないのも、そのことと関係があったりするのだろうか。

「勇気が学校に行っていないのも、やっぱり急に環境が変わったせいなんですか？」

「えっ？」

てつじさんは一瞬、どうして知っているのかとでも言いたげな、当惑した表情で訊き返したが、私が「ほら、この間言ってたじゃないですか」と言うと、その時のことを思い出したように、「ああ、そうでしたね」と表情を和らげて頷いた。

「実は勇気が学校に行かなくなったのは、これが初めてじゃないんです。ここに越してきて、最初に入った学校でも、勇気は一週間も経たないうちに、登校をぐずるようになりましてね。その時は担任の先生にも来てもらって、一生懸命二人で説得したけど、やっぱり無理でした。そのことがかえって、あいつを頑なにさせちゃって。

だけど、今度の学校では、毎日機嫌よく家を出て行くんで安心してたんです。ある日、担任の先生から『勇気君が学校に来ていない』って連絡があるまでは。その時は本当にびっくりしましたよ。だって、俺は毎日あいつがちやんと学校に行ってるよばかり思い込んでたんですから。それで次の日、こっそりあいつの跡をつけてみたらあの漫画喫茶に入っていたって……。きつとあいつ、俺に相談したらまた先生とか呼ばれると思って、学校に行っていないこと秘密にしていると思っんですよ。だから俺、正直、どうしていいか分からなくて……」

そう言うと、てつじさんは深い溜息をついた。その話を聞いて、私の脳裏には、ふと甦ってくる幼い頃の記憶があった。私もそんな

に長い間ではないが、小学校の頃いじめにあつて、学校に行くのを嫌がったことがある。その時、理由を尋ねられて、両親にいじめのことを相談すると、二人はすごい剣幕で怒り出し、学校やいじめた相手の家に怒鳴り込んでいきそうになつたので、必死で止めたのを憶えている。

それから私は、たとえ外でいじめにあつても、両親には相談しなくなつた。今思うと、きつとあの時、私は両親に問題を解決して欲しかつたのではなく、ただそつと話を聞いて欲しかつただけなのだと思う。自分の辛さを誰かに分かつて欲しかつただけなのだと思う。その時の自分が、今の勇気の姿と重なつた。

「でもね、絶対どこかに解決方法はあると思うんです。だから僕はそのため、できるだけのことをしてやるつもりですよ。両親がいらないからつて、あいつには絶対、寂しい思いをさせたりはしない。こつちでも友達をたくさん作つて、楽しい学校生活を送らせてやらないと、あいつを僕に託して死んだ両親に、申し訳が立たないじゃないですか……」

てつじさんはそう語気を強めると、包丁を持つ手に力を込めた。ザクツ、ザクツ、と潔い音を立てて刻まれてゆくキャベツを見ながら、私の頭の中では、一ヶ月前「今日ここで僕に会つたこと、兄さんには言わないでほしいんだ」と囁いた、怯えた子犬のような勇気の顔が浮かんで消えた。私はどうして彼がてつじさんに学校に行つていないことを言えないのか、その理由が少し分かつた気がした。

パーティーは、それから間もなく始まつた。私たちはテーブルの中央に置かれたホットプレートで、めいめいに好きなトッピングを載せて、一枚ずつお好み焼きを焼いていった。すると、リビングはあつという間に、ジウジウと生地が焼ける香ばしい匂いと、食欲をそそる甘辛いソースの香りでいっぱいになつた。お好み焼きのいいところは、特に料理の技術がなくても、たいていは上手く焼けるところだ。だが、私たちが次々とふつくらと形の整つたお好み焼

きを完成させていく中で、勇気のお好み焼きだけは、プレートの上で生地がバラバラになって空中分解を起こしていた。

「うわ、何それ。きつたなーい」

相変わらず言葉をオブラートに包むということを知らないヤイちゃんは、見たままの感想を率直に述べて、勇気をムツとさせた。

「何だよ、見た目が悪くたって、どうせ味は同じだろ」

「どうせ味が同じなら、見た目がいい方がいいに決まってるやん。

どう？ 見て、私の」

ヤイちゃんは自分の焼いたお好み焼きを、勇気にひけらかすようにしながら口に運んだ。すると隣にいたみゆうまでもが、

「生地を薄く広げて、大きいのを焼こうとするから、うまく引っくり返されへんねんて。もつと中央に寄せるようにして、厚めに生地をひいたらきつとうまく焼けるはずやで」

と、失敗の理由を冷静に分析したりしたので、勇気はますます不機嫌になった。

「何だよ、みんなして僕のこと馬鹿にして！」

彼はとうとうかんしゃくを起こすと、みんなの皿にバラバラになったお好み焼きを無理やり載せて回って、大ひんしゆくを買った。

「ちよつとー、人に押し付けんと、自分で責任とって食べなさいよ！」

「い・や・だね。だいたい、下準備ほとんど兄さんにやらせてたよせに、えらそうに言うなよ」

しかし、こんなにつんけんしたやりとりを交わしていても、話しているうちに少しずつお互いの警戒心が薄れてきて、気がつけばちよつと打ち解けていたりするから不思議だ。勇気は出会った時よりも、数段解きほぐれた表情を見せてくれるようになっていて、私は彼との距離が徐々に近づきつつあることを感じていた。

みゆうはさっきの続きで、てっじさんとアートの話で盛り上がった。特に彼女は、てっじさんが「昔、個展をしたことがある」と言つと、そのことに強く興味を示していて、場所の借り方やらお

金はいくらぐらいかかるのかなど、具体的なことをいろいろと質問していた。

「いいなあ、個展ができるなんて。いろんな人に作品を見てもらえて、きつと世界が広がるんでしょうね」

みゆうが羨ましそうに呟くと、てつじさんは「倉田さんもやってみればいいのに」と、事もなげに言った。

「ええつ、無理ですよ。私なんか開いても誰も来ないし。第一、ギヤラリー借りられるような貯金もないですもん」

「でも、そんなに高くないギヤラリーだってありますよ。倉田さんの作品って魅力あると思うし、観たい人だってたくさんいるんじゃないかなあ」

「そうですね……」

それでもまだ自信がなさそうなみゆうに、てつじさんは背中を押すように言った。

「肝心なのは自分のモチベーションですよ。作品を見てもらいたいつて強い気持ちがあれば、あとは何とかなるもんですって。少なくとも、僕はいつもそう思ってますよ」

するとてつじさんは、ふつと壁に目をやり、隅っこに貼られた一枚の写真を指差した。五年前の日付が刻まれたその写真には、まだ小さな勇気と、柔らかな表情のお母さんとお父さん、そしててつじさんの家族四人が、コテージ風の丸木小屋をバツクに揃ってフレームに収まっている。

「これはね、うちの両親が始めた、夢の結晶みたいなペンションなんです。絵を描くのが好きだった二人は、昔から自分たちと同じ趣味を持つ人のために、美しい自然に囲まれた環境で、のんびり風景画でも描けるような場所を作りたいって言ってましてね。十数年かけてやっとお金を貯めて、高原の空気のいい場所にペンションをオープンしたんです。その両親がいつも言っていたのが、がんばればいつか夢は叶うっていうことでした。僕が大阪に出てきて、それなりにデザイナーとしてやっていけているのも、この言葉のおかげだ

と思うんです。残念ながらその両親は、半年前に事故で亡くなってしまうたんですけどね」

するとその場にいたみんなが、しみりと感慨深い溜息をついた。そこには、二つの感情が含まれていたと思う。大切なことを身をもって子供に教えた、てつじさんの両親への深い感嘆と、もう彼らはここにはいないのだという、運命へのやり切れない思い。しかしそんな中で、勇気だけが一人、冷めた顔で素知らぬふりをしているのが、不自然に思えて仕方なかった。

「母親は湖が見える窓辺に座って、油絵を描くのが好きでしたね。勇気はその頃まだ小さくて、隣で母親にちよっかいをかけては、よく怒られていたもんですよ。なあ、勇気？」

「兄さん、その話はもうやめようよ」
てつじさんの隣で、勇気がぶっきらぼうに言った。

「でもその影響が、こいつも昔からすごく絵が好きでしてね。前の学校では、学級新聞の四コマコーナーに漫画を描いたりもしてたんですよ。確かそれ、どっかに置いてあったんじゃないかな？」

てつじさんが立ち上がって、その学級新聞を探しに行こうとするのと、ふいに勇気が、リビングに響き渡るような鋭い声で叫んだ。

「もうやめろって！」

私たちを威圧するように睨みつけた彼の顔は、実の兄であるてつじさんさえ、一瞬たじろがせるほどだった。

「どうしたんだよ？ いきなり」

「別に。ただあんなボロいペンションを、そんなによく言う兄さんが不思議だと思ってさ。馬鹿みたいだよ、父さんも母さんもいい歳して『夢は叶う』なんて言って、あんな狭い小屋を必死で守ろうとするなんて」

どこか挑発的に話す勇気の目は、一切の感情を排するかのよう、ぞっとするほど冷めていて、さつき私たちと軽口を叩いていた彼とは、まるで別人のようだった。てつじさんは彼の口から飛び出す、耳を疑うような言葉にいたたまれなくなつて、とうとう最後には「

「いいかげんにしろよ！」と、大声で怒鳴って彼を遮っていた。

「なあ、勇気。お前どうしちゃったんだよ。あのペンションはお前だって大好きな場所、父さんと母さんのことだって、ずっと尊敬してたじゃないか。それをどうしてそんなに急に、ばかばかしいとか言っただよ？」

弱々しく訴えるてつじさんの口調は、もはや懇願しているようである。さえあった。勇気はそんな彼を辛そうに見つめながら、低い声で咳いた。

「……兄さんは知らないんだ」

「知らないって何のことだよ？」

だが、勇気は首をうなだれたまま、何も答えようとはしなかった。彼は「宿題が残っている」と言っただけ席を立つと、とうとう黙りこくったまま自分の部屋へ引っ込んでしまった。

「なんか、ごめんね。変な雰囲気になっちゃって」

てつじさんは、ヒヤヒヤしながら成りゆきを見守っていた私たちに、そう言っただけで、空気を替えるように明るい口調で、「あつ、そうだ。勇気の学級新聞を見せるって言っただよ」とポンと手を叩き、ラックに立てかけてあるファイルをこそごと探し始めた。

しばらくすると彼は、「あつた、あつたよ」と言いながらこつちに戻ってきて、私たちに日に焼けた一枚のわらばん紙を見せてくれた。

「三年一組 すくすく新聞」

右上にタイトルの書かれたその学級新聞には、クラスのニュースや、給食の人気メニューのアンケート結果、教室で育てているウサギの観察日記などと一緒に、左下の方に小さく四コマ漫画が載せられていた。

「『サイバーロボ 風神』 鳥井ゆうき」

それは紛れもなく、勇気が描いたオリジナルの四コマ漫画だった。中身は正義の味方のロボット「風神」が、困っている人を助けよう

としてドジを踏んでしまうというギャグ漫画で、少しギャグが滑っている部分はあるにせよ、小学生にしては画力・内容ともに、上手いと言える出来栄であった。

何だ、ちゃんと自分の絵、描けるんじゃない。

私は漫画喫茶で、頑なに自分の絵を描くことを拒否していた彼のことを思い出し、不思議に思った。目の前の未熟な四コマ漫画は、彼が描く緻密な漫画の模写よりも何倍も魅力的なのに、あえてそれを隠そうとする彼の真意が解せなかった。

「勇気って変わった子やんね」

帰り道、私たちの話題は、危うく兄弟喧嘩が勃発しかけた、さっきのパーティーのことで持ちきりだった。中でも初対面だったみゆうは、人当たりがよくて話もうまいてつじさんと、パーティーの間中しかめっ面を下げていた無口な勇気とが兄弟だとはとても信じられないようで、何かというと二人を比べては、世の中似てない兄弟もいるもんよねーと、感心したように呟いていた。

「何がどう変わってるのかっていうのは、うまく説明できへんねんけど、変に大人びてるっていうか、全てのことに対してやけに冷めてる感じがするんよね」

「しかも、嘘もうまいしね」

隣でマイちゃんが付け加えた。

「嘘？」

「そう。初めて会った時のことなんやけど、本当は学校に行かずに漫画喫茶で時間潰してて、チイちゃんにお金を借りたくせに、てつじさんには学校帰りに参考書買ってお金がないから借りたって嘘ついてさ。それが事情を知ってるうちらが聞いても、真実なんじゃないかと思うくらいすらすらと喋るから、本当にびっくりしちゃった」

「そうなんや。そんな子には見えへんかったけどな」

みゆうが意外そうに言った。

「でもさ、そのことてつじさんも気付いてるみたいだよ。勇気には

知らないふりをしてるだけで」

「え、そうなん？」

今度はヤイちゃんも驚いてこっちを振り返った。

「うん。何か前の学校でも同じことがあって、その時は担任の先生とかも出てきて説得したけど逆効果やってんで。だから、今はてつじさんも慎重になってるみたい」

「ふーん、そんなことがあったんや」

それを聞いたみゆうが、ポツリと呟いた。

「何か、普通の仲のいい兄弟みたいに見えたから、そんな秘密を抱えていたなんて意外。そう思うと、家族なんて他人が端から見たくらいじゃ、本当のところは分からなかったりするんやろうね」

その言葉を聞いて、私の脳裏には、もう一つ思い浮かぶ家族の姿があった。結婚三十年目の円満な家庭。しかしその実は、「愛している」という言葉を交わすのを聞いたことすらない、経済力と家事の交換条件でつながる共依存夫婦。見慣れた実家の風景だった。

その時、ヤイちゃんが唐突に、ポケットから携帯電話を取り出して、私たちにこんなことを訊いてきた。

「ねー、ところでさ、私、さっきてつじさんから電話番号とメルアド訊かれたんやけど、みんなも訊かれた？」

「え、マジ？」

私とみゆうはびっくりして身を乗り出した。今まで勇気一色だった話の流れは、その一言で一転した。

ヤイちゃんはその反応にちよつとひるんで、「あれ？ みんなは訊かれてない……の？」と、おそろおそろ訊き返した。

「訊かれてない、訊かれてないよ！」

「ちよつとー、ヤイ子にだけ訊くってどういうこと？ これって差別やと思わへん、チハル？」

私たちが冗談半分で文句を言うと、ヤイちゃんは「ちよつと、ちよつと」ときまり悪そうに言い訳をした。

「たぶん時間がなかったから、私にしか訊かなかったんやちやう？」

ほら、私に言ついたらきつとみんなに教えると思つたんやつて……」

すると、みゆうが「分かってないなー、ヤイ子」と言つて、諭すように彼女の肩に手を回した。

「それはどう考えても、てつじさんがヤイ子のこと気に入ってるってことやん。勇気を出して訊いたその男心を分かってあげなさいな」
「でも、私あんまりアートのことか詳しくないし、どちらかというともみゆうの方が、あの人と話が合ってた感じじゃない？」

だが、みゆうは「そんなことないって」と言つて、大げさにかぶりを振った。

「確かに話が弾んでいたように見えたかもしれないけど、それは私があるいろと訊くから、親切に答えてくれてただけやつて。本当はヤイ子と、もつと違う話もしたかつたと思うよ。だからわざわざ、帰り際に電話番号を訊いたんじゃない。もし、ヤイ子がいいと思うんやつたら、そんなに自信なさそうにしないで、がんばつてみたら？」

「そつやなー、どうしよう……」

ヤイちゃんはまだ自分の気持ちを計りかねるように、てつじさんの番号が入った携帯を片手に持ったまま悩んでいた。

「お、悩んでるよ。このモテ子が」

それを見てみゆうが、嬉しそうに彼女をからかった。

この時、みゆうがどういう気持ちだったのかは、本人に訊いたわけではないので、私には分からない。もしかしたら、ヤイちゃんが感じていたように、少しはてつじさんに対して憧れのような気持ちを抱いていたのかもしれない。だが、たとえそうでも、この電話番号の一件を聞いたことで、彼女は自分の中に芽生えた淡い感情は胸にしまつて、潔く身を引くことを決めたようだった。そういうところがみゆうらしいと、私は思う。

ふと気付くと、私たちは阪急電車の踏切を超えて、キャバクラやピンスポのぎらついたネオンがひしめく、ピンク街の真っ只中にい

た。通りではマイクロミニのスカートをはいたキャバ嬢やホストたちが呼び込みで精を出し、ほろ酔いのサラリーマンたちは快樂の渦に飲み込まれていくように、次々と薄汚れた雑居ビルの中に姿を消していく。路地に建ち並ぶ立ち飲み屋では、日雇い労働者たちが稼いだわずかな日当で酒をあり、コンビニの前では髪を金色に染めたヤンキーたちが、集団でわいわい騒ぎながら煙草を吹かしていた。夜の街は、さながらカーニバルのように、妙に浮かれた賑わいを見せている。

私はその影を作らない、不自然なネオンの明かりに、不思議な安心感を抱いていた。

この街は優しい。この社会で居場所があるのかわからないのかわからない、中途半端な存在の私たちに優しい。闇の中にぼうつと浮かび上がった、この竜宮城のような明るさの中にどっぴりと浸かっていれば、私たちはいつまでも見たくないものから、目をそらし続けていられるのだ。

見上げるとネオンの一つに、黄色い電飾で月が描かれた、「FULL MOON」という、ラブホテルの看板があった。それは、三日月、半月、満月と順番に明かりが灯っていき、最後には中心から円周にかけてパツ、パツと、花火のように点滅を繰り返す仕組みになっている。よく見ると、ところどころ電球が切れていたりして、いかにも安っぽい月だ。だが、そんな目玉焼きの黄身のような、平面的な月を見ていたら、なぜか無性に泣きたい気分になった。

第三章

あのパーティーの後、私たちの生活には二つの変化が訪れた。

一つ目は、ヤイちゃんがてつじさんと付き合い始めたこと。あの日、家に帰ると案の定、てつじさんから彼女にメールがあつて、二人は何度かのメールのやり取りの後、一緒に食事に行くことになった。そして、二度目のデートで告白され、現在は交際約一ヶ月。目下ラブラブ期間中だ。

ヤイちゃんは、彼氏ができてからどんどんきれいになる。以前は出かける時でも、ジャージに毛の生えたようなヨレヨレのジーンズを穿いていたくせに、今はたかだか近所のスーパーに行くだけでもアイロンのかかったスカートを穿き、お化粧品も以前の三倍は時間をかけるようになった。おかげで最近では、もともと造りのよかつた顔だちがいつそう際立って、街を歩いていてもすれ違う男の人がいちいち振り返るくらいだ。私はそういうヤイちゃんを見て、彼氏の効果でつてすごいんだなと思うと同時に、こんな短期間で、劇的に彼女を変えてしまったてつじさんに、軽い嫉妬さえ感じてしまう。

もう一つは、みゆうがついに個展を開くと決意したことだ。彼女はてつじさんに「倉田さんも個展をやってみたら？」と言われてから、そのことをずっと真剣に考えていて、折りに触れては私たちやてつじさんに相談を持ちかけていた。だが、とうとう一週間前のある日、いつものように梅田の歩道橋から帰つてくると、彼女は開口一番、「決めた。私、個展をすることにする」と、高らかに私たちに宣言したのだ。きっかけは何だったのかは分からない。でも、相変わらず自分の絵に見向きもせずに通り過ぎてゆく人の波と、毎日足を運んでも中身が減らないバッグを見ていたら、ふとこのままの状態を続けることに不安を感じたのかもしれない。

彼女は一度決断すると、行動が早く、迷いが無い。翌日には、彼女は早速、必要な資料をかき集め、個展を開く場所探しを始めた。

パチスロに費やされていたお昼の時間は、ほとんどギャラリーの下見に当てられ、午前中にインターネットや雑誌でめばしい場所を見つけては、そこを訪ねていくというのが、彼女の新たな日課になった。だが、それだけ努力を重ねても、条件に合った場所というものには、そう簡単に見つかるものではなかった。

まずは、お金の問題。個展を一つ開くとなると、費用は場所代だけで済むわけはなく、チラシ代やDM代、新しい絵を描く画材代など、それに付随する費用がかさんでいき、自然にその額はどんどん膨らんでいく。そうになると、ただでさえギリギリの生活費でやりくりしているみゆうの予算では、最初の時点で候補がかなり絞られてしまうのだ。しかも彼女が、どうせなら大阪市内の便利のいい場所で、何とか文化センターとか、そういう公共施設以外の場所がいいとか贅沢を言い出すもんだから、選択肢はさらに狭まる。

まあ確かに、初めての挑戦だし、大切なチャンスだから最良の条件を揃えたいっていうみゆうの気持ちは分かるんだけど、それにしてもやっぱり妥協は必要だ。結局、彼女は何十件とギャラリーを見て回っているにも関わらず、どことも話がまとまらないようで、毎回帰ってきた彼女から聞かされるのは、「今日も駄目だったわ」という無駄足の報告ばかりだった。しかし、人間そういう八方塞がりの時って、思わぬところから助け舟が現れたりするものだ。

きっかけは、父が私にかけてきた一本の電話だった。内容は「元気が？」とか、そういういう他愛もないものだったと思う。いつもは一言二言、会話を交わしたら、それで電話を切ってしまう親不孝な私なのだが、その日はみゆうが場所探しに苦労していることもあり、だめもとのつもりで父にギャラリーをやっている知り合いがないか尋ねてみた。大阪の印刷会社でサラリーマンとして働く父は、私と同じく美大を卒業しており、それなら同級生に画廊に携わる人が一人や二人いたっておかしくはないと思ったからだ。すると、意外なほどあっさりと、「ああ、それなら一人いるよ」という返事が返ってきた。

「ほんまに？ どこで、どんなギャラリーやってる人？ その人、頼んだら安くしてくれへんかな？」

私が熱心に訊いてくるので、父は驚いて「お前、画廊なんかに興味あつたっけ？」と、電話の向こうで不思議がった。

「違う、違う。一緒に住んでるみゆうがさ、個展をやりたいつて言ってるんやけど、ほら、私たちつて貧乏やん？ だから予算に合うギャラリーがなかなか見つからなくて困ってるんよ」

事情を説明すると、父は「ふーん、そうか」と納得し、私にこんな提案をした。

「じゃあ、安くしてくれるかどうかは分からんけど、一ぺんその友達と一緒にそこに行ってみるか？ 大学の同級生の村上音二郎って奴がやってる、本町の『ギャラリー和音』ってとこなんやけど、そういうことやったら、お父さんから村上に連絡しといてやるわ」

「ほんまに？ そうしてもらえると助かる！」

「いいよ。久しぶりにあいつの顔も見たいし、今度の日曜あたり一緒に行くか？」

「うん、OK。みゆうにも言っとく」

こうして私たちは、その週の日曜、父とともに『ギャラリー和音』を訪ねることになったのだった。

当日はなぜか、ヤイちゃんまでもが、私たちにくつついてやって来た。いつもなら友達そつちのけでデートばかりしているくせに、今日に限って一緒に行きたいなんて言い出すもんだから、どういう風の吹き回しかかと思っていたら、どうやらつじさんが東京出張でこっちにいなくて、家で一人で寂しい思いをしたくないらしい。全く、現金なヤイちゃんだ。

父は揃って駅にやって来た私たちを見て、「やあ、やけに大所帯やな」と、その人数の多さに驚いていた。だが、若い女の子三人に囲まれて悪い気はしなかったようで、「そんな大人数で押しかけたら向こうもびっくりするで」と戸惑った顔をしながらも、目尻と口

元は何となく綻んで見えた。

本町は、繊維問屋やアパレルメーカーが密集する、ファッションの街として知られると同時に、ギャラリーが多く建ち並ぶアートの街でもある。「ギャラリー和音」はそんな中でも、昭和初期に建てられたという、レトロな雰囲気で異彩を放つビルの二階にあった。一階は舶来物を扱う昔ながらの洋品店になっており、私たちはその片隅に見える「ギャラリー和音 事務所」と書かれた古ぼけた扉をノックした。すると、奥からいかにも画家くずれといった風貌の、中年のおじさんが出てきた。

「おお、ヒデやん、久しぶりやな」

英明という父の名をあだ名で呼ぶのを見て、私はすぐ、この人が例の音二郎さんなのだと分かった。彼はぼさぼさの長髪を隠すようにベレー帽を被り、民族衣装のような柄のチュニツクに破れたジーンズという無国籍ないでたちをしていた。口ひげの下にパイプを吹かしている姿がいかにも怪しい。私は真面目で堅物だと思っていた父に、こういう友達がいたというのが、ちょっと意外だった。

音二郎さんは「まあ、立ち話もんだから」と言つて、五人入ればいっぱいになってしまいそうな狭い事務室に、私たちを招き入れた。部屋の中はダンボール箱や積み上げられた書類の束などで雑然としていて、ただでさえ小さいスペースをさらに狭めている。

「どうも旅行に行くたびに荷物が増えちゃってね」

音二郎さんはそんなことを言いながら、大雑把にそれらを壁際に寄せると、空いたスペースにパイプ椅子を置いて私たちを座らせた。「また、どっか外国に行つてたんか？」

父が訊くと、音二郎さんは「ああ、ちょっとインドの方に二週間ばかり」と言つて、フーツと天井に紫煙を吹き上げた。

「でも、このギャラリーを継いでからは、なかなか昔みたいに長い旅はできへんなあ」

「お前は学生の頃から、大学にも行かずにふらふらと旅行ばかりしてたもんなあ」

そういえば、いかにも事務所然とした味気のない白壁やスチールの棚の上には、アフリカかどこかのものだろうか、不釣り合いにエスニックなお面や置き物が飾られている。私がそれらのものをぼんやりと眺めていると、それに気付いた音二郎さんが、「お嬢ちゃんも、アフリカに興味あるんか？」と声をかけてきた。

「はあ……。でも、私はアフリカどころか、海外旅行すらあんまり行ったことがなくて……」

「そうか、それはもったいないなあ。いいぞ、旅は！ 若いうちは、いろんなところに行って広い世界を見にやあ！」

そう言つと、音二郎さんは昔を懐かしむような遠い目で、自分が経験した旅の話始めた。昔は直行便があまりなくて、飛行機を乗り継いでいろんな国に渡ったことや、エジプトの砂漠で迷子になったこと、ギリシヤで出会った世にも美しい女性についてなど……。音二郎さんの話はいつ終わるとも知れないほど広がっていくので、さすがにこれでは夜になってしまうと思つたのか、父は途中で「あの、言つてたギャラリー貸してほしいってことなんやけど……」と、遠慮がちに個展の話を持ち出した。

「ああ、そう、そうやったな。すまんすまん。つい話し込んでしまった」

音二郎さんはそう言つてガハハと笑つと、「で、どの子が個展をしたいんやって？」と私達の顔を交互に見遣つた。

「あ、私なんですけど。倉田みゆうといます、よろしくお願いします」

大切なオーナーを前に、緊張気味のみゆうをよそに、音二郎さんはぐいっと彼女の手をとつて握手をすると、「みゆうちゃんか、よろしく」と、いきなり「ちゃん」付けて彼女を呼んで、私達を驚かせた。

「しかし、ほんま感心やなあ。若いのに自分でお金出して、人に作品観てもらおうなんて。今の若い子は無気力で忍耐がないなんて言うけど、こつやつてチャレンジ精神旺盛な子がいるってことは、え

えこつちゃ」

「あの、でも私、あんまりお金がなくて……、その、こちらはおい
くらぐらいで借りられるでしょうか……」

みゆうがおそるおそる聞くと、音二郎さんは彼女の心配を吹き飛
ばすように、「あー、いいのいいの」と言つて、ぶんぶんと首を大
きく横に振つた。

「お金のことなんて、ほんまに気にせんでええよ。うちはご覧のと
おり、もうけは二の次でやってるから。他のところでやったらばか
高いやる？ そんなん、これから売り出そうつちゆう貧乏な画家の
卵にとつては、殺生な話やわなあ。だからな、俺はそんな金がなく
ても可能性を持ったフレッツシユな若者のために、安くて個展ができ
る場を提供してあげたいわけよ。だって新しい才能がうちを足がか
りにビッグになってくれたら、こんな嬉しいことはないやんか。俺
なんかそれが好きやから、ギャラリーやってるようなもんやもんな
あ」

音二郎さんは人懐っこい笑顔を浮かべて早口に話すと、また一息
フーツとパイプの煙を天井に吐き出した。

音二郎さんは、てつじさんとはまた違ったタイプの親しみやすさ
を持った人だった。てつじさんのそれが、ある程度の距離感を保ち
ながらも、相手をリラックスさせるよう巧妙に計算された都会的な
ものであるのなら、音二郎さんのそれは、会ったその時から相手と
の距離をグイグイ縮めてしまふ、押しの強い下町的なものだ。しか
し、たとえ少々なれなれしくされても、死語を連発されても、その
ちよつと抜けたキャラクターゆえに、なぜか憎めない。私たちも知
らず知らずのうちに、その独特なペースに引き込まれてしまい、い
つの間にか彼のことを、まるで古くからの知り合いのように、「お
つちゃん」と気安く呼ぶようになっていた。

さて、その「おつちゃん」は、ひとしきり自己紹介が終わると、
「じゃあこんなところで長話もなんだから、とりあえず上に行って
ギャラリーを見てみるか？」と、さっきの自分の長話などとうに忘

れた様子で、そう提案した。

私たちは音二郎さんの案内で、いったん事務所を出て、その脇にある細くて急な階段を二階へと上っていった。

「ねえ、大丈夫かな？」

みゆうが私の耳元で囁いた。正直、私も不安を隠せずにはいた。だって、こんな個人的な音二郎さんが経営するギャラリーだもの、内装もとんでもなく常識はずれだったらどうしよう。頭の中で、アフリカのお面やアジアの仏像が並ぶ、エキセントリックな空間の想像が膨らんだ。

しかし上に着いてみると、私たちのそんな心配は、いい方に裏切られた。

「ちよつと狭いけど、そこは我慢してや」

そう言つて音二郎さんが開け放った扉の向こうに広がっていたのは、イノセントな世界に迷い込んでしまったような、白い、真っ白な空間だった。広さは十平方メートルぐらいでそれほど大きくはないが、天井が高いために空間には伸びやかさがある。天井にほど近い、高い位置にある窓からは、柔らかい陽光が差し込んでいて、無機質な白い壁に、暖かな明るさを投げかけていた。そして、一歩踏み出せば、足音さえも耳に響いてくるような奥行きのある静寂。ここには、飾られた作品を特別なものに見せてくれる、空間と音響の魔力が存在していた。

「わー、すごい。めっちゃくちゃ、いい感じじゃん」

みゆうは一目でここが気に入ったようで、トントントンと駆け足で中央に歩み出てゆくと、全てを視界に収めようとするかのように、ぐるりと部屋の中を見渡した。それはあたかも何も無い壁に、自分の作品が飾られたところを、頭の中でシミュレーションしているかのようだった。

「今、活躍してる作家でも、若い頃、よくここで個展してたりしてんで」

みゆうは音二郎さんの言葉に熱心に頷くと、頭の中であとからあ

とから溢れ出してくるアイデアを、堰を切ったように話し始めた。やっぱりこれだけ空間を使ってやるんだから、今までよりもっと大きな作品をいっぱい描かなきゃねとか、あの窓からの光を使って何かできないかなとか、目を輝かせて話す彼女は、水を得た魚のように生き生きとしていた。

しかし、私とヤイちゃんはそんな彼女のことを、離れた場所からどこか白けた気分で見つめていた。親友として、夢に一步踏み出した彼女を応援すべきなのは分かっているのだけれど、なぜか素直に喜ぶ気になれない。このまま彼女が私たちを置いて、一人で遠くに行ってしまう気がして、寂しい気持ちが波のように押し寄せてくるのだ。

「いいな。みゆうやチイちゃんには、やりたいことがあって」

ヤイちゃんが隣でポツリと呟いた。いつも人のことをボロクソ言っている彼女にしては、珍しく弱気な発言だった。

「どうしたん？ 急に」

「うん……、何か、てっじさんと付き合うまではそんなこと考えたこともなかったんやけどさ。あの人もみゆうみたいに絵が好きで、暇があったらパソコンいじって何か描いてるような人やから、時々ポツンと置いてきぼりにされたような気分になるんだよね。ああ、この人は人生の半分を、絵を描くことに捧げちゃってる人なんや。この人がいなくなったら、私には何もなくなっちゃうけど、私がいなくなっても、この人は私の半分しか傷付かないんやろうなって思ったら、何だか悔しくって」

「まだ付き合ったばかりなのに、何も別れた時のこと考えてんの？」

私は笑った。しかし、ヤイちゃんは相変わらず浮かない顔のままだ。

「ほら、前にさ、みゆうが生まれ持って与えられる才能の話をしてたことがあるやん？ その時さ、じゃあ私には何があるかなーって考えてみたら、何もなかったんよね。私って昔から、勉強でも運動

でもそれなりにはこなせたんやけど、これって熱中できるもの一つもなくて。何がしたいのか、したいことがあるのかさえ分らないまま、ここまで来ちゃったの。だから、みゆうみたいに自分にはこれしかないっていうものを、はつきり持っている人って、正直羨ましいと思う」

ヤイちゃんには、その恵まれた美貌があるやん、その顔で誘ったら、億万長者だってイケメンモデルだって、どんな男だっつついてくるよ、と私は心の中で思ったが、口には出さなかった。

ヤイちゃんは「何がしたいのか分からない」と言っただけで、それは彼女が何も持っていないからじゃなくて、いろいろなものを持ちすぎているから、選べないだけなのだとは思う。神様は変に分け隔てがないから、よほどの天才を除いて、お前はこれをやるべきだなんて、偏った才能の与え方はしない。なまじっかどれもそんなくこなせるような、平等な能力の分配のされ方をしているから、私たちは何をしたいのか分からなくて迷ってしまうのだ。どうせなら、他に何もできなくてもいいから、何か一つ飛び抜けた才能を与えてくれたらいいのに。私は思ってもしようがないことを分かっているながら、妙に律儀な神様の采配を恨めしく思った。

「おっちゃん、決めた。私、ここで個展するよ」

向こうでは、ついに理想の会場を見つけて、意気込むみゆうの声が聞こえてくる。音二郎さんは親指と人差し指をくつつけて「OK」というサインを作ると、彼女にニツと微笑みかけた。

私はこの時、もし人間をグループ分けする神のチヨークがあつたのなら、みゆうがいる場所と私とヤイちゃんがいる場所に、くつきりと白い線が描かれたような気がした。目指すべきゴールに向かって、一步踏み出したみゆうと、未だ袋小路で立ち往生しているヤイちゃんと私。その隔たりは、思っているよりも、きつと大きい。

みゆうはそれに気づいているのかいないのか、向こうから「おい、ごめんね、退屈させて」と、私たちにこやかに手を振ってきた。窓から差し込む光に照らされた彼女の顔は、いつもより数倍輝

いているように見えた。

光と影　、ふとそんな言葉が胸中に去来して、私は眩しそうに目を細めながら、窓辺に佇む彼女に、控えめに手を振り返した。

ギヤラリーからの帰り、私はヤイちゃんやみゆうと別れた後、父に誘われて二人で本町にある居酒屋に飲みに行った。入ったのは赤提灯のかかった、カウンターだけのこぢんまりとした店で、扉を開けると同時に、恰幅のいい主人の、「いらっしやい！」という威勢のいい掛け声が飛んできた。まだ早い時間帯だったせいか、店内は他に客はなく、私たちはカウンターが一番奥の席に座ると、父は焼酎を頼み、私はビールとおつまみを何皿か注文した。

「お疲れさん」

私たちは会社帰りの上司と部下みたいに、そう言って照れ混じりの乾杯をした。

「ああ、うまい」

父は待ちわびたように、グビグビツと豪快に焼酎を喉にかき込んだ。すると、浅黒い皮膚に深い皺が刻まれたその顔は、みるみるうちに、熟れた桃のように赤味を帯びていった。

いつの間にか、月に一度、あるいは二ヶ月に一度、父とこうして飲みに行くのが、私の習慣の一つになった。兄がいた頃は、男同士二人でよく飲みに出かけていたのだが、兄が東京に出てしまった今、母があまりお酒を飲めないうちでは、父の相手はもっぱら私の役目になっている。

父は酔うと、少し饒舌になる。家ではむすつとして真面目なことしか言わないくせに、お酒が入ると気が緩んで、しょうもない親父ギャグを言ったり、スケベな話をしたりもする。そういえば父の初恋の話や、結婚前に付き合っていた女性の話を聞いたのも、どこかの居酒屋のカウンターだった。私は二十歳を過ぎてから、父という人を本当の意味で知ったような気がする。

「ああ、やっぱりこうやってチハルと飲む酒はいいなあ。お母さん

は酒が飲めないから、家で一人で飲んでても、いまいち盛り上がりへんねんなあ。別にそんなに遠いわけどもないんやから、チハルも下宿なんかやめて実家に戻ってきたらええのに」

「うん、そっやね……」

私は曖昧に返事をした。実は私の実家は、同じ大阪府内で電車で一時間もあれば行き来できるところにあり、地方から出てきているみゆうやヤイちゃんとは違って、どちらかというと、積極的に親元を離れる必要はない。でも、それでも私が家を出ることを選んだのは、家庭という狭小なコミュニティから生じる、息の詰まりそうな閉塞感から逃げ出したかったからだだった。些細な争いから募る相手への不満。これが社会という開かれた環境ならば、結局最後は他人ということと割り切れるのだからうけれど、家庭という閉鎖的な環境では、それは出口を見出せずに、家族の間を巡りめぐって、やがてはお互いのことが許せなくなるまで関係が煮詰まってしまう。私はそんな負の連鎖から、一抜けたをしたかったのだ。今、父とこうして笑ってお酒を酌み交わせるのも、やっぱり適度な距離があったからこそなことだと思う。

「お母さんも寂しがってるで。チハルはこのまま結婚も就職もしないつもりなんやろうかって、心配してる」

「うん……。でも帰ったら帰ったで、けんかばかりしてしまっからなあ」

私は溜息をつきながら、もうだいぶ髪に白いものが混ざり始め、目尻や口元にも皺が目立つようになった、老けた母の顔を思い浮かべる。私とは水と油のように、百八十度違った価値観を持つ母。もしかしたら私が今のように結婚や就職に憧れを抱かなくなったのは、この母の影響かもしれない。

母はちょうど今の私と同じ歳の、二十七歳で父と結婚した。結婚前に好きな人もあったようだがうまくいかず、祖父にすすめられるまま父とお見合いで一緒になり、結婚と同時に仕事も辞めて、専業主婦になった。「そういう時代だったのよ」と母は言う。

しかし母は、自分で決断したこの選択を、心のどこかで後悔しているようなところがあった。

「私は家事と育児で自分を犠牲にしている」

母は私が幼い頃、父と喧嘩をすると、よくこんな言葉を洩らしていた。その言葉がふすまの向こうから聞こえてくるたび、私は自分の存在が母の足かせになっていているのだと、意味もなく罪悪感を抱いていたのを憶えている。それが母の自己弁護に過ぎないと気が付き始めたのは、一体いつごろのことだっただろうか。

しかし母はそのくせ、「犠牲」にした「自分」を取り戻すために、何かを始めることはしなかった。代わりに彼女がしたことといえば、夫や子供のために自分を「犠牲」にすることが、「正しい」ことなのだ、自己を正当化することだった。そして母はその見返りを、父や兄や私に求めた。

家庭を愛し、妻を愛し、誠実な夫であるということ。親を敬い、勉強を頑張り、従順な子供であるということ。母はそんな絵に描いたような家族に恵まれた、幸せな主婦でなくてはならなかった。何よりも家族全員がいつも母を気にかけて、愛情あふれる感謝の言葉をかけることを彼女は求めていた。

しかし、いくらその希望に応えるように努力をしても、母は決して満足してはいないようだった。

「私はこんなにあんたたちに尽くしているのに、あんたたちはその半分も愛情を返してくれない」

母は私や兄が外で遊んできて家を空けることが多くなると、決まってるような風に文句を言った。しかし本当のところ母は、私たちに何をして欲しいのか、自分でも分かっていたのではないかと思う。ひびの入ったコップに水を入れても、決して一杯になることがないように、まず彼女は自分の足元に目を向けて、その亀裂を修復するところから始めるべきだったんじゃないだろうか。

「そんなに不満なら、離婚して新しく人生をやり直せばいいじゃない?」

私は一度、母に本気でそう言ったことがある。もちろん父と母が別れることを望んでいたわけではないが、母が本当に自分の望む人生を手に入れるには、もう家庭の束縛から解放してあげるしか方法がないのではないかと、その時は思ったのだ。だが彼女はそれを聞くこと、不思議そうに首を傾げて、こう言い返してきた。

「何を言ってるの、そんなことをしたら、あんたたちが困るんじゃないの？」

その時、私は悟ったのだ。ああ、この人は本気で現状を変える気など、さらさらないのだ。今のぬくぬくとした状態を捨てる気などなくせに、子育てや家事といった大義名分を盾に、自分は被害者ぶって愚痴をこぼし続けるのだ、おそらく一生。

今も母は私を見ると、「あんたは好き勝手できていいわねえ。私の時代だったらとても考えられないことよ」と、皮肉っぽく洩らす。私はそのたびに、言葉の裏に透けて見える彼女の弱さとずるさに、眉をひそめてしまう。

「私はね、お母さんみたいになりたくないの。だってそうやる？あの人を見てたら、いつも何かしら不満ばかりで、全然幸せそうじゃないんやもん。別に将来に対する保証書はいらないから、私は自分のやりたいことを、精一杯やっただけで言える人生がいいの。十年後、二十年後に、後悔を他人に押しつける人生なんてまっぴら」

私はほわんとした酔いの勢いまかせて、父に不満をぶちまけた。父は残り少なくなつた焼酎をちびちび舐めながら、そんな私の話をつくでもなく否むでもなく、曖昧な微笑を浮かべて聞いている。この顔は父の十八番だ。気の強い妻と娘に挟まれて、何か揉めごとに巻き込まれそうになった時、父は決まってこういう顔をする。愛嬌を振りまきながら、嵐が過ぎ行くのを素知らぬ顔で待っていれば、自分とはばつちりを食わずに済むとも思っているのだろう。私は父のそういう優柔不断な態度が、無性にむかつく時がある。

「で、そのチハルのやりたいことってというのはどうなんや？ 漫画とやらは順調に進んでるんか？」

すると、父がいきなり話の腰を折るようにそんなことを訊いてきたので、私は一瞬たじろいでしまった。

「うん、まあ……ね」

私は言葉を濁す。父の一言で、形勢は一気に逆転してしまった。

軽快に回っていた私の舌は急に勢いを失い、まるで足かせをはめられたように、一言一言が重くなった。今度は私が愛嬌を振りまきながら、嵐が過ぎゆくのを黙って待つ番だ。

「でも、漫画つてのはあれやろ、売れたらすごい儲かるけど、そうなれる人間つていうのは、ごく一握りなんやろ」

「うん、まあ……」

私はまた曖昧に返事をする。父の矢継ぎ早な質問を、愛想と沈黙で拡散させようとしてもするかのように。もちろん、何歳までにデビューしたいとか、どんな漫画を描きたいとか、将来のおぼろげなビジョンはないわけではないけれど、今私がそれを話せば、ミュージシャンを指すプー太郎が言い訳をするがごとく、言葉にすればするほど嘘っぽく聞こえるのは目に見えている。

私は苦し紛れに「すみません」と店主を呼び、追加でビールの中瓶を一本注文した。ついでにつまみの追加もいらぬか、父に訊いてみる。別に親孝行な娘を演じたかったわけではなく、その際に話が別の方向に反れることを、密かに狙っていたのだ。するとその作戦が功を奏したのか、ビールが来て二度目の乾杯をした頃には、父はそれつきり漫画の話題は口にしなくなっていた。

「昔な……」

グラスのビールが半分ほどに減った頃、父はそんな言葉で、唐突に昔話を始めた。それがあまりにも前の話題と繋がりがなかったのので、私は思わず「えっ？」と訊き返してしまった。

「昔、俺が子供の頃、うちの親父が大事にした箱があつてな。三十センチ四方ぐらいの、黒い塗りの小さな箱なんやけど、決して誰も中身が見られんように、いつも蝶番に鍵がかかってたんや。『中身は何や』って訊いても、『子供は知らんでいい』の一点張りで、

絶対に教えてくれん。それで気になって気になってしょうがなく
なあ」

「……へえ」

私はとりあえず小さく相槌を打った。正直、父がなぜ今、何の前
ぶれもなくこんな昔の話を持ち出すのか、わけが分からなかった。

「こっちは好奇心旺盛な子供やる、見るなど言われれば、よけいに
見たくなる年頃やんか。それである日、こっそり中身を見てやろう
と思って、親父の留守中に部屋に忍び込んだんや。そしたら机の引
き出しに、その箱のものらしき鍵を見つけた」

「で、中身は見たの？」

私が訊くと、父は笑ってかぶりを振った。

「いや、それが今から開けようっていうまさにその時に、すごいタ
イミングで親父が帰ってきてなあ。部屋に入ってきた親父は、俺を
見て激怒したよ、『どうしてこんな泥棒みたいなことをするんや』
って、げんこつで頭殴られて、結局見れずじまいやったんや。それ
以来、親父が怖くて箱の中身を見ようとするのはやめたんやけど、
子供心に思ったよ、親父がこんなに怒るのは、きっと中にすごいも
のが入っているからに違いない。高価な宝石とか、そうでなかった
ら代々伝わる家宝とか。長い年月の間にどんどん妄想が膨らんでい
って、高校生になる頃には、あの中には家の隠し財産が入ってるん
だって、そう思い込んで疑わなかったな」

「へえ、あのおじいちゃんがねえ」

言いながら私は、子供の頃にしか会ったことのない、祖父の姿を
思い浮かべた。父そっくりの、バカ正直で堅物のおじいちゃん。申
し訳ないが、隠し財産を持つような度量の大きいイメージはない。

「それで、結局その箱の中身ってというのは分かったの？」

「ああ。まあ、大人になる頃には、俺もその箱のことはすっかり忘
れてたんやけど、三十五で親父を亡くした時に、荷物を整理してた
ら、たまたまあの箱が出てきてな。そういえば何が入ってたんやろ
うって気になって、もう怒る人間もないし、思い切って開けてみ

たんや」

「で、何が入ってたの？」

私が訊くと、父は遠い昔のことを懐かしむような、自己完結的な笑いを一瞬浮かべた。

「別に何てことない、ただの短編小説が三編、入ってただけやったわ。親父が若い頃に書いたもんで、恋愛小説なんやけど、これが素人目にも分かるほど、ひどい代物でなあ。でも一生懸命書いたもんやから捨てるわけにもいかんし、かといって子供たちに見つかって物笑いの種にされるのも親父のプライドが許さへん、だからあんな風に鍵をかけて、誰にも見られないようにしとったんやろうな」

「へえ……」

私はあの真面目を絵に描いたようなおじいちゃんが、真剣に机に向かつて、愛だの恋だのについて、つらつらと書き綴っている姿が想像できなかった。きつとできた作品は、読んでも方が赤面してしまふような、くさいセリフのオンパレードなのだろう。私に芸術的才能がないのは、もしかしたら遺伝なのかもしれない。

「なあ、チハル」

「ん？」

父は手先で割り箸の袋をいじりながら、ろれつの回らない舌で、ぼそぼそと独り言のように話を続けた。

「何か俺はな、大人になるっていうことと、この箱を開けることは、どっか似てるような気がするんや。長い間、温めれば温めるほど、人間の理想なんて膨らんでいくもんやけど、蓋を開けてみれば、現実なんてしょうもないもんや。花だってそうやろ。遠くで見てたらああ、なんてきれいなんやって思うけど、近づいてみたら虫食いの穴があったり、ところどころ枯れてたり、汚い部分も見えてくる。きつとそうやって一つ一つの理想を打ち砕かれていって、人は自分にできることとできないことを理解していくもんなや。お前は若いからそんなのつまらなくて思うかもしれんけど、そうやって現実を受け入れるのも、それはそれで、悪いことばっかりやない気がする

るけどなあ……」

私は父が不器用ながらも諭そうとしていることが何なのか、少しは分かるような気がした。だけど、それを認めると、自分の今までしてきたことが、ガラガラと音を立てて崩れていく気がしたので、あえて分からないふりをして黙っていた。

気がつくと、先ほどまでガラガラだったカウンターには、少しづつ人が埋まり始め、店内はおでんを炊くダシの匂いと、魚を焼く香ばしい煙がいつぱいに立ちこめていた。私は有線で流れる坂本冬美の艶っぽい演歌を聞きながら、空になった父のグラスに、二杯目の酌をした。

「で、どうなんや、生活の方は。金は足りてるんか？」

「うーん、何とかやってるけど、やっぱりちよつと苦しいかな」

私は下心を見透かされないように、なるべく控えめな、かわいい娘を演出した口調で答えた。すると父は「お母さんには内緒だぞ」と言いながら、のろのろとした動作でポケットから財布を取り出すと、中から五万円を抜いて私に渡してくれた。口では現実を受け入れるなんて言いながら、娘には甘い。言ってることやってることが一致しないのが、父のいいところでもあり、悪いところでもある。「ほんとにいいの、ありがとう」

私はさも思いがけないおこづかいに心から驚いているという風に、大切そうにそれを財布にしまうと、大して減っているわけでもないのに、しらじらしく父のグラスにビールを継ぎ足した。父はそれでもにこにこしながら、溢れ出しそうなビールの泡に、愛おしそうに口をつけた。

これだから父と飲みに行くのはやめられないのだ。

第四章

みゆうが音二郎さんの画廊を訪れてから、約四ヶ月が経った。

今年の冬は短く、ついこの間、凍てつくような北風がダークグレに染まった街を吹きすさび、街路樹の葉を残らず落としたかと思ったら、いつの間にか窓の外は、芽吹いた桜や、電柱の下に咲くタンポポなど、春の訪れを告げる植物達が、顔を覗かせるようになっている。

季節感などまるで意識したこともないこの部屋にいても、日に日にあらわになってゆく春の兆しは、いやが上にも感じられた。窓を開けると、どこからか漂ってくる青くさい草の匂いや、頬に触れる生ぬるい風。それらは例年ならば、やっと寒い冬も終わって過ごしやすい季節がやって来たのだと、歓迎すべきものだったのだが、今年だけはそれらは刻々と迫ってくる時をカウントする、ストップウォッチに過ぎなかった。

四月のみゆうの個展まで、残り時間はあと一ヶ月を切っていた。日が迫ってくるにつれ、部屋の中はまるで画材屋の倉庫のように、キャンバスやら絵の具やらが散乱していき、もう足の踏み場もないほどになっている。みゆうは毎日、ほとんど外に出ることもなく部屋に閉じ籠って、自分より大きいキャンバスに埋もれるようにして絵を描き続けていた。

最近、私はこの部屋に長い間保たれていた均衡が、にわかには崩れ始めるのを感じていた。それは、「みゆう」と「ヤイちゃん・私」の間にできた、溝とでも言おうか。個展が近づくにつれ、みゆうの言葉や態度からは次第に余裕がなくなってゆき、代わりに彼女の周りには、有刺鉄線を張り巡らせたような、ピリピリとした緊張感が漂うようになってきた。たとえ少しも筆が進まなくても、彼女は片時たりともキャンバスのそばを離れようとはせず、食事すらろくすっぽとろつとしないので、これでは絵が完成する前に、彼女の方が体を

壊してしまうのではないかと心配になるほどだった。

私たちはそんな彼女の邪魔をしないよう、自然と日常生活にも細心の注意を払うようになっていった。ヤイちゃんはテレビの音を消すためにイヤホンを買い、中央にあったちゃぶ台は畳んで壁に立てかけられ、私は蓋をした浴槽の上で漫画を描いた。巨大なスヌーピーはテレビの上に強制移動させられ、食事はみゆうの目について嫌味にならないよう、最近ではできるだけ部屋の隅でひっそりとるようになっていた。

もちろん、それらはみゆうから強いられたことではなかった。彼女はむしろ私たちを気遣い、「ほんと私のことは気にせんと、いつも通りにしていてね」と、ことあるごとに言ってくれる。だが、迷惑になると分かっているのに、あえて大音量でテレビを観たり、お腹を空かせた彼女の前でこれ見よがしに食事をする友達がどこにいるだろう。それに、こんな風に部屋の中が誰かを中心に回することは、例えば私が失恋して落ち込んだ時や、ヤイちゃんのお母さんが大阪に出てきて、うちに泊まった時なんかにもあったことで、長い短い差はあるにせよ、ある期間を過ぎれば元に戻ることで、大した問題ではなかった。

私が心配しているのは、もっと別の精神的レベルでの均衡の問題だった。つまりこの四ヶ月の間で、私たちを見るみゆうの目が、以前に比べて微妙に変化しているような気がするのだ。

例えば、私やヤイちゃんが昼間テレビを観たり、雑誌を読んだりしてゴロゴロしていると、以前のみゆうならば一緒にあって「あー、暇だな」とか言ってくれていたはずなのに、今は背を向けて黙々と絵を描きながら、時々、同情するような目でこっちを見る。それに今までは自分の年齢など数えたこともなさそうだった彼女が、最近「私もいつまでもプーでいるわけにもいかないし、将来のことちやんと考えないと」なんて、やたらと年齢のリミットを意識した発言が多くなったのだ。私は彼女から「チハルはこれからどうするの？」と訊かれるたびに、父や母から訊かれているのと同じような、

肩身の狭さを感じてしまう。

ヤイちゃんはそんな変化に気付いているのかいないのか、最近ではつじさんの部屋に入り浸りで、家を空けることが多くなった。でも、私には逃げ場所がない。私はみゆうと狭い部屋で二人きり、ひたすら彼女の変化に気付かないふりをして、以前と変わらず馬鹿話を続けるしかなかった。でも、いくら表面では「お互いいい歳してプー太郎だね」なんて笑い合っている、その言葉はどこか空回りして虚しかった。

そして、破綻は突然に訪れた。空気を詰め込みすぎた風船が、パチンと弾けるように。

その日、みゆうは個展に出す中でも、一番大きな、畳一枚ほどもあるキャンバスの作品に取りかかっていた。私は少し離れた場所であ留守中のヤイちゃんのイヤホンを借りて、お昼過ぎのワイドショーを観ているところだった。だが、番組がCMになった時にふと見回すと、さっきまで窓際でキャンバスと睨み合っていたみゆうがどこにもいない。どこに行ったのだろうかと思っていると、しばらくして、描きかけの原稿の束を両腕に抱えたみゆうが、バスルームから恐い顔をして私のところへやって来た。

「また、お風呂場で漫画描いてたやる。気が遣わなくなっていていいって言ったやん」

彼女は原稿をどさつと床に置くと、すばやい動作で散らかった自分の画材を隅に寄せ、壁に立てかけてあったちやぶ台を組み立て始めた。

「いいって、いいって。今、みゆうは大事な時なんやから、思う存分、部屋を使ってくれたらいいねって」

私は彼女の方に駆け寄り、足が半分立てられたちやぶ台を元に戻そうとした。だが、みゆうはそれを遮って、喝を入れるように私に言った。

「あかんって。私が大事な時期やったら、チハルだってそうなはずやん。こうやって私に遠慮してる間にも、時間なんてすぐに過ぎて、

二十八が来て、二十九が来て、あつという間に三十になっちゃう。チハルももつと頑張らないと」

チハルももつと頑張らないと　？

彼女の何気ない言葉に、私はカチンときた。以前のみゆうなら、「私たちも頑張らないと」とは言っても、「チハルも頑張らないと」とは言わなかったはずだ。その言葉の裏には、「私もこんなに頑張ってるんだから」という、ある種の優越意識が隠されているような気がして、私は反発を覚えた。みゆうにしてみれば、私のことを思っただけのことなのに、そんな風に取り立て心外だと思っただけかもしれないが、善意から出た言葉の方が、むしろ余計に始末が悪い。

「それ、どういう意味？」

私はとげのある口調で言った。すると、彼女はそんな反応など思ってもよらないという風に、「どういう意味って、どういう意味？」と、きよとんとした顔で訊き返してきた。

「だーからー、みゆうのさっきの言い方はさ、『チハルも私みたいにがんばらないと、駄目人間になっちゃうよ』っていう風に聞こえたんやけど」

「そんな、私はそんなつもりじゃ……」

「そんなつもりでなくても何でも、私にはそんな風に聞こえたの。そりゃみゆうが一生懸命頑張ってるのは認めるよ。でもさ、だからってそんなに急に上からものを言うようにならなくてもいいじゃない？ 働いててもそうでなくても、どっちが偉いってわけでもないって、前に言っただけのはみゆうでしょ？」

私は自分の口から、堰を切ったように不満が溢れ出すのを止められなかった。みゆうは最初こそ我慢強く耳を傾けていたものの、私の言い分のあまりの理不尽さに、途中からみるみる不機嫌になっていき、ついには私の顔をキツと睨みつけて、こう言い返してきた。「いつ、誰が上からものを言った？ 私はチハルにも漫画家になつて欲しいから、『チハルも頑張ろう』って言っただけやん。そんなの勝手な思い込みやわ」

「あつ、今また『チハルにも』って言ったでしょ。それってもう自分ではできてるって前提で話してない？ そりゃ、みゆうはいいよ。自分のやりたいことはつきりしてるから。でも、私は何か始めるたびに、本当にこれが自分に向いてるのか、本当にこれが自分のやりたいことなのか、自信がなくて、頑張りたくても何に対して頑張りたらいいのか、それすらも分かんないんやもん。みんなが自分と同じだなんて、勝手に決めつけないでよねっ！」

「……いいかげんにしてよ」

みゆうは私の子供じみた言いがかりを、ひどく冷めた口調で一喝した。彼女の顔には怒りを通り越して、もはや軽蔑の色さえ現れているように見えた。

「チハルは私が、今まで何の迷いや不安もなく突き進んできたって本気でそう思ってるわけ？ そりゃ、やりたいことを見付けるのが早い人もいれば遅い人もいるのは、私にも分かるよ。でも、チハルはそれを盾に言い訳をしているとしか思えない。結局、チハルは結論を先延ばしにして、いつまでもぬるま湯に浸かっていただけなんとちやうん？ 何の責任もないモラトリアムから、本気で抜け出すつもりなんてないんやわ」

みゆうの言うことは一言一言いちいち筋が通っていて、返す言葉が見付からなかった。しかし今の私には、それを素直に聞き入れる精神的な余裕などなかった。

「そんなことないもん！ 私だって早くこんな状況何とかしなきゃって、本気で考えてる。何にも分かってないくせに、好き勝手なこと言わないでよっ！」

私はヒステリックにそう叫ぶと、何か言い返そうとするみゆうを押しつけ、荒っぽくドアを開けて、ついに部屋を飛び出してしまった。背後から「ちよつと、チハル、どこ行くの！」と、呼び止めるみゆうの声が聞こえた。だが、その声はアパートの外まで追いかけてくることはなかった。

私は入り組んだ住宅街を夢中で走り抜け、大通りまでやって来る

と、やっとそこで少し歩を緩めた。きれぎれになった息を整え、少しずつ冷静さを取り戻し始めると、それと同時に後悔が洪水のようにどっと押し寄せてきた。

どうしてあんなことを言ってしまったのだろう。私がみゆうにぶつけた言葉は、自分への怒りを転嫁した言いがかりにすぎない。結局、私は友人の挑戦を応援するようなふりをして、陰ではそれをうとましく思い、挫折を願っていたのだ。私は自分の心の醜い部分を鏡で見せつけられた気がして、ひどい自己嫌悪に陥っていた。

気が付くと、私はいつの間にか、ネオンの消えた昼間のピンク街の中に紛れ込んでいた。通りの向こうには、勇気と出会ったあの漫画喫茶が見えている。「一時間四百円 漫画読み放題」と窓に描かれた文字を見ながら、私は半年前の、あの日の出来事を思い出していた。思えばあそこで勇気と出会ったことが、全ての始まりだった。あの時、私が興味本位で彼に声をかけたりしなければ、今でも私たちはあの十畳の部屋でいつもと変わらない生活を続けていただろう。ヤイちゃんは彼氏が欲しいとか言いながらテレビに齧りつき、みゆうはパチスロで稼いだお金を画材に注ぎ込んで、売れない絵を描いて歩道橋で露店を出していただろう。なのに、この半年で、私たちを取り巻く環境はめまぐるしく変わってしまった。そして私だけが、その変化の波に乗り切れずに立ちすくんでいる。

勇気に会いたい。

ふと、心の奥からそんな衝動が湧き上がってきた。勇気に会いたい。あの漫画喫茶の陰気くさい机の上で、出会った時と同じように、カリカリと規則的にペンを走らせる勇気の姿が見たい。他のものが全て刻々と変化を遂げてゆく中で、彼だけはただ一人、変わらずにあの場所に留まり続けているのではないか、ふとそんな気がした。私は彼に会い、彼の存在を確認することで、自分の居場所を確かめたかった。

私は通い慣れた階段を上り、カランカランと安っぽい鈴の音がする扉を開けた。煙草の煙と古本の匂いが籠る店内は、相変わらずど

ことなく殺伐としていて、私はその風景に不思議な懐かしさを覚えた。

受付を済ませると、私は足早に狭い本棚の間や、規則的に並べられた長机の列や、甘い匂いを漂わせるドリンクバーを、勇気の姿を求めてさまよい歩いた。だが、すれ違う客の顔を覗き込むぐらいに捜しても、店内に勇気の姿は見当たらなかった。読書席では以前と変わらず、フリーターや、ヤンキーやサラリーマンやおたく青年が熱心に読書に耽っている。しかし、その風景から勇気の姿だけがぽっかりと抜け落ちていた。

私はひどく惨めな気持ちになった。もう、ここに勇気はいない。彼が座っていた隅の席には、積み上げられた漫画本や、びっしりと線で埋められた白いノートや、足元のランドセルの代わりに、前の客が置きっぱなしにしていた、空のグラスがあるだけだった。私はついに、あれほどまでここに根を張っていそうに見えた彼にさえも、置いてけぼりを食らわされてしまったのだ。

私は店を出ると、疲れた足取りで当てもなく街をさまよい始めた。みゆづが絵筆を走らせる私たちの部屋にも、父や母が待つ実家にも、どこにも帰る気になれない。私は賑やかに人が行き交う商店街の中で、大海にぼつんと放り出された小舟みたいに、悲しいくらいに一人だった。でも、本当は最初から一人だったのかもしれない。ただ、今まで私はいろんな人に囲まれて過ごしてきたから、そのことに気付かなかっただけなのだ。

いつの間にか周りの風景は、ごちゃごちゃしたピンク街から、個人商店が建ち並ぶ下町へと、様を変えていた。当てもなくぶらぶら歩いているうちに、ずいぶん駅から離れたところまで来てしまったようだ。目の前には、緑色のフェンスに囲まれた小学校の広いグラウンドが見える。偶然にも、そこは勇気が通っている小学校だった。ちょうど下校時間と重なっているのか、門からは授業を終えた生徒たちが、あとからあとから駆け出してきた。その絶え間ない人の流れをぼんやりと眺めていると、ふと門のところによく見知った

顔が現れて、私はハツとした。他の生徒たちが友達と楽しそうにお喋りをしながら出てくる中、たった一人誰とも喋らずに、とぼとぼと元氣のない足取りで下校してくるその子。

「勇氣！」

私は向かいの通りから大声で叫び、彼の方に駆け寄っていった。

勇氣は私に気付くと、手に持ったノートのようなものを、とっさに後ろに隠して言った。

「何してんの？ こんなところで」

彼は相変わらず、こんなところで偶然会っても、笑顔ひとつこぼさずに淡々としている。いつもならむかつくほど度の過ぎた冷静さだが、今日ばかりはそんな態度も無性に懐かしく思えて仕方がなかった。

「ちよつとね、散歩してたら偶然辿り着いて。でも、こんなところで勇氣に会えて嬉しい」

偶然の再会に涙を浮かべんぐらいに喜ぶ私を見て、勇氣はかなり気味悪がっているようだった。

「何か悪いものでも食べたんじゃないの？」

真顔でそう尋ねてくる彼の戸惑いぶりがおかしくて、私はまた「ふふふ」と笑った。

しかし、こうやって近くで見ると、彼の様子がいつもと少し違っていることに気付く。遠くから見た時は分からなかったのだが、いつもはガラス玉を埋め込んだみたいに涼しげな目元が、泣いた直後のように赤く腫れているのだ。そういえば校門から出てくる時の表情も曇っているように見えだし、学校で何か嫌なことがあったのだろうか、私は心配になった。

「どうしたん、何かあった？」

ちよつとその時、校門から出てきた生徒と勇氣とがぶつかって、その拍子に彼が後ろに隠していたものが、バサリと地面に落ちた。それは思っていた通り、A4サイズの薄いノートで、風でペラペラとめくれていくページを見て、私はごくりと唾を飲み込んだ。つい

半年ほど前、びっしりと緻密なコマ割りで埋め尽くされていたあの模写のノートが、見る影もなく黒いフェルトペンで乱暴に塗り潰されていたからだ。

「見るな！」

勇気はさつとノートを取り上げると、鋭い視線で私を睨み上げた。その目には、「何を訊かれても、絶対に何も言わない」という強い意志が感じられて、私は口をつぐんだが、彼が学校でいじめに遭っているらしいということは、誰の目にも明らかだった。「学校に行っていない」と漫画喫茶で聞いた時から、うすうすは感じていたけれど、悪い予感ばかりで済まされたようだ。

「今のは見なかったことにしろよ。もし兄さんに言ったりしたら、承知しないからな」

私は全てのことを一人で背負いこもうとするかのように、きゅつと固く口を結んだ勇気の気迫に押されて、思わず「うん……」と頷いてしまった。だが、彼はそれでも安心できないようで、「約束だぞ！」と念を押すと、私に指切りをさせた。交わした小指は思っていたよりも華奢で、心なしか少し震えているように思われた。

国道沿いの自動販売機から、ゴトツ、ゴトツとたて続けに出てきた二つの缶を取って、私は日暮れの近づいた公園へと急ぐ。向こうではブランコに乗った小さな影が揺れていて、私は昼間の熱気と夜の冷気が混じり合ったためるい風を頬に感じながら、腕に抱えたホットのミルクコーヒーと冷たいカルピスソーダを見比べ、このセレクトは我ながら正解だと一人で満足していた。

「ほら。これ、私の奢り。どっちでも好きなん取り」

二本の缶ジュースを差し出すと、ブランコに座っていた勇気が顔を上げ、黙って私の手から、カルピスソーダを抜き取った。私は隣のブランコに腰かけると、プシュツと勢いよく缶を開け、シロップのように甘いコーヒーを喉に流し込んだ。

公園前の国道は、時間が経つごとに交通量が多くなり、眩しい車

のヘッドライトが波のように連なって、私たちの前を通り過ぎていつている。だが、それとは対照的に、薄暗い公園の中は、小学生や親子連れも引き払って閑散としていた。

「学校、行ってたんやね」

沈黙を破って私が言うと、その声は静寂の園内に、水面に広がる波紋のように響いていった。勇氣は返事の代わりに、ただ黙って頷いた。

「いつから？」

「さあ。あのお好み焼きパーティーがあつたすぐ後ぐらいかな。いつもみたいに漫画喫茶で時間を潰して帰ろうとしたら、ある日、店の外に兄さんが立ってたんだ。兄さんは悲しそうな顔で僕に言ったよ。『勇氣、ごめんな。俺が何とかしてやるから』って……」

私はあのパーティーで聞いた、てつじさんの言葉を思い出していた。「僕は弟のためにできるだけのことをしてやりたいんです」、そう言った時、すでにてつじさんは、そうすることを心に決めていたのかもしれない。

「兄さんは僕が学校に馴染めるように、いろいろしてくれたよ。クラスメートを家に呼んでバーベキューを開いたり、クリスマスパーティーを開いたり、でも、結局そんなことをしても、ほとんど何も変わらなかつただけだね……」

勇氣の言葉を聞くだけで、私にはその風景がありありと思ひ浮かぶようだった。きつとあの人のことだから、本当に弟のためにあらゆる手段を尽くしたのだらう。でも、それはきつとほとんどが骨折り損で終わったに違いない。子供は子供にしかないデリケートな視線で、自分たちとは毛色の違った人間を見分け、巧妙に排除していくものだ。おそらくそれは、外部から大人がどんなに働きかけたところで、嫌いなものを好きと言えないように、根本からは変えることはできない。そしてそのことを、勇氣もまたよく分かっている。

「学校が嫌なのは、いじめに遭ってるから……？」

私が訊くと、勇氣は自分の内側を覗き込むように、一瞬、暗い眼

をして言った。

「……僕がみんなに嫌われるのは、本当は僕が誰も必要としないからだ。きつと僕は、仲間に入れてって頼んでる時でも、その子と本当に仲良くなりたから言ってるんじゃないやなくて、一人にならなくてすむ適当な場所を探しているだけなんだ。だから、そういう本心から出ていない言葉って、きつと相手に伝わっちゃうんだよ」

「誰も必要としていない」、私は彼の言葉に、何か引つかかる違和感を覚えた。まるで他人事のように語る彼は、むしろそう思い込むことで、自分から一人になるうとしてるように見えたからだ。

「違う、違うよ。勇気がみんなと打ち解けられへんのは、誰も必要としていないからじゃない。誰にも本心を見せようとせえへんからやわ。だって勇気は何があってもそうやってぎゅっと口を結んだまままで、感情を表に現さないでしょ？ たぶんそれが他の子から見たら、何を考えてるか分からないように見えるんとちゃうかなあ。

そのノートだってさ、漫画本のコピーみたいで、勇気の個性が何にも出てないやん。みんなが勇気のこといじめてしまうのは、分からないものに対する怖さの裏返しなんだよ、きつと」

「何だよ、偉そうに」

勇気はぶつきらばうに言つと、飲みかけの缶を置き、勢いよく地面を蹴ってブランコを漕ぎ始めた。その放物線の間で、私の「当たり前やん、大人やねんで、こっちは」という言葉が、ぶつける先を見つけれず宙を漂っている。それに応える「じゃあ、どうすればいいんだよ」という勇気という言葉も、上へ下へと気まぐれに揺れていた。

「自分の絵、描いてみれば？ そしたらさ、クラスの子とも話が広がるかもよ」

「……描けるもんなら、描きたいよ」

勇気は空を仰ぎながら、吐き捨てるように言った。そして、地面に足を突き出して荒っぽくブランコを止めると、うつむいたきり黙り込んでしまった。

「どうしたの……？」

彼は私の言葉など耳に入っていないかのように、焦点の合わない目で通りを過ぎてゆく車両の流れを見つめていたが、しばらくすると、何かを決意したように顔を上げて、重々しく口を開いた。

「うちの両親が死んだのは……事故じゃないかもしれないんだ……」
今まで緩慢に流れていた公園の空気は、その言葉で一瞬にしてピーンと張り詰めていった。彼は声を震わせながら、言葉を続けた。

「あの事故があった日、母さんは出かける前に、『もし、お母さんやお父さんがいなくなっても、勇気は大丈夫よね？』って訊いたんだ。前から欲しがっていた漫画も買ってくれたりして、妙に優しいのが気にはなってた。そしたら、駅まで父さんを迎えに行くって車で出た帰り、山道のカーブでスリップして、車ごと崖に転落したんだ」

「……」

私は何と云っていいか分からなかった。「そんなの、ただの偶然かもしれないじゃない」、そう言いたかったけれど、勇気の思い詰めた表情には、安易な慰めの言葉を許さない何かがあって、私は言葉を飲み込んだ。

「どうして？ だって勇気のご両親は長年の夢を叶えて、理想のペンションを建てたって、てつじさんも言ってたじゃない？」

「……兄さんは知らないんだ。十八でこっちに出てきて、あんまり実家には帰って来なかったから。本当は三年ぐらい前から、うちのペンションはうまくいってなかった。はつきり聞かされたわけじゃないけど、家に知らないおじさんたちが来て、お金を返せって言ってきたりするから、僕にも何となくは分かったよ。その頃から、仲の良かった父さんと母さんの言い争いも多くなって、二人は自分たちの夢を守り続けていくことに、疲れているみたいだった。だから、あの事故の知らせを聞いた時、僕はピンときたんだ。ああ、父さんと母さんは、お金とか仕事とか、そういう現実的なものに追いかけられない世界に行くことを選んだんだって……」

勇気はそこまで話すと、深い溜息をついた。いつの間にか、辺りは墨をこぼしたような濃い闇に包まれ、冬のように冷たい夜風が肌を刺している。

「……辛いね、好きな人がそうやって目の前で苦しんでいるのを見るのは、辛いね……」

私は搾るような声で、小さく呟いた。すると、耳元にしゃくりあげる声が聞こえてきて、顔を上げると、隣で勇気が泣いていた。顔を真っ赤にしながら、今までこらえていた感情が一気に溢れ出したかのように、彼はぼろぼろと大粒の涙をこぼしていた。

「僕は怖いんだ。あんなに楽しそうに夢について話し合って、頑張ってきた父さんと母さんが、その夢のせいで不幸になっていくのを見てしまったから。自分もいつか何かを叶えたいと思った時に、同じようになってしまう気がして怖い。そうしたら、あんなに好きだった漫画も、いつの間にか描きたいと思わなくなってた……」

私は今初めて、彼が頑ななまでに自分の殻を守る理由が分かったような気がした。彼は長年温めてきた夢に挫折した両親を見てきたからこそ、そうなるまいとして感情を介さずにも物を見ようとしているんじゃないだろうか。何にでも無関心を装っているのも、時間や記録といった目に見えるものには興味を示さないのも、彼の必死の防衛本能なのだ。でもそんな彼でも、自分の好きなものへの愛着を、完全に封印することはできなかった。漫画喫茶で黙々と模写を続けていたのは、そんな抑えつけられた自我の、無意識の抵抗だったのかも知れない。

「夢とは何だろう」と、私は時々考える。世の中ではそれを持っていないと人間扱いされないくらい、重宝がられている代物らしい。綿菓子のようにふんわりと甘い誘い文句で、私たちを魅了する夢。だけど、中に入ってみると、そこは茨の蔓に彩られた急勾配の岩山だ。その頂点を目指そうとして、どれだけ多くの人々が傷を負い、辛酸を嘗めて、深い挫折感を味わいながら、途中退却を余儀なくされることか。しかし、世間で取り上げられるのは、氷山の一角の成功

者ばかりだ。私たちは彼らの「夢は素晴らしい」という美辞麗句につられて、とても登れそうにもない山を登ろうとする。もしくは、登れると勘違いしてしまう。夢にはそんな罪深い一面もあるのだ。「ねえ、勇氣。うちの親はさ、若い頃に自分のやりたいことをできなかったって、ずっと後悔してて、それに比べたら、やりたいことを叶えられた勇氣のご両親は、その分幸せだったんじゃないかなって思うけど……。でも、どうなんやろうね。本当のところはよく分かんないや……」

勇氣は返事をせず、遠い記憶を思い出すように、空を仰ぎ見ている。頭上には、透き通った早春の夜空に、ふたご座が輝いている。二等星のカストルと一等星のポルクス。性質の違う二つの星が、同じように輝いて見えるように、私と勇氣も全然違うようできて、どこか似ているのかもしれないと思った。

なりたくないものは分かっているのに、何になりたいのかが分からない。行きも戻りもできなくて、立ち往生しているところが、私たちはよく似ていた。

「勇氣、さっきのノート出しな！」

私が威勢よく言うと、勇氣は濡れた臉をこすりながら、「はあ？」と怪訝そうに顔をしかめた。

「いいけど、何すんだよ」

「これ破るんだよ、今から。あんたが！」

「はあ？」

勇氣はさらに呆れた顔で訊き返した。

「何でそんなことするんだよ？」

「だって、いい機会やと思わへん？ この塗り潰されたノート破つてさ、勇氣を悩ませてる辛い記憶とか、学校でのいじめのこととか、そういうのぜんぶ蹴散らしちゃおう！」

「……あんた、僕よりも幼稚だな」

勇氣はやれやれと肩をすくめたまま、ちっとも相手にしようとなないので、私は仕方なく彼からノートを奪い取ると、それを半分に

ちぎって片方を彼に渡した。

「一緒にやるんやったら文句ないやる。『せーの』で破るよ」
私はそう言つて、強引に彼をたきつけた。

「じゃ、せーの！」

ビリッ。勇気も気乗りしないながら、しづしづ私につられてノートを破った。黒く塗り潰された紙の束は、私達の手の中で小気味よい音を立てながら、二つ、四つ、八つとみるみるうちに細かくちぎられていった。

勇気を縛っている嫌な思い出から、早く彼が自由になれますように、ビリッ。勇気がもう一度、自分の漫画を楽しんで描けるようになりそうですように、ビリッ。勇気が早くクラスメートと打ち解けることができますように、ビリッ。私は頭の中で掛け声をかけながら、夢中でノートを破つてゆき、薄暗い公園には紙の裂ける音が、楽器のリズムのように軽快に響いていった。

気が付くと、私たちは途中から元々の理由も忘れ、どこまで小さく破ることができるか、そのこと自体に夢中になっていた。足元にこんもり積もった紙吹雪の山を見ながら、私と勇気は顔を見合わせ、クスクスと笑った。

家に帰ると、部屋は誰もおらず真っ暗で、点けっぱなしのテレビだけがぼうつと鈍い光を放っていた。辺りを見回しても、みゆうの姿はどこにもない。今日はどうしてこうもすれ違いが多いのだろう。そう思っていると、カーテンの陰から煙草の煙が一筋上っているのが見えて、私は急いでベランダへ出ていった。

「みゆうー！」

振り返った彼女は、さつき喧嘩をしたことなどすっかり忘れてしまったかのように、穏やかな表情で煙草を吹かしていた。

「さつきは、ごめんね」

「もうええよ、気にしてへんし」

みゆうは私に笑顔を見せると、ふうつと空に向かって紫煙を吐き

出した。私は彼女の隣にそつと歩み寄り、夜風で冷え切ったアルミサツシの手すりに、肘をついてもたれた。ぴたりと沿わせた素肌から、冷たさが体の芯まで伝わってくる。

「私もさ、つい気負いすぎて、周りが見えてなかったんやと思う。ずつとチハルやヤイ子が我慢してくれてたのにも気付かずに、こつちこそごめんね」

彼女の顔には久しぶりに、以前のような余裕が戻っていて、私はそれが嬉しかった。そして、安心すると急に笑いが込み上げてきた。「そうやで。無理しすぎて体を壊したりしたら、元も子もないんやからね。これをきっかけに、またいろいろチャンスがあるかもしれないんやし」

そう言つと、なぜかみゆうは急に真面目くさった顔で押し黙ってしまった。不思議に思つて「どうしたの？」と訊いてみると、彼女は「それがさ……」といつになく歯切れの悪い口調で、話を切り出した。

「今まで言つてなかったんやけど、一週間ほど前に実家から電話がかかってきて、うちの父親、入院したんやつて。それが結構難しい病氣らしくて、治るまでけつこう時間がかかるみたい……」

「ええつ、大丈夫なん？」

私はびっくりして身を乗り出した。するとみゆうは、「あつ、でも命に関わる病氣じゃないから大丈夫やで」と慌てて付け加えた。

「ただ、しばらくは仕事を休まないといけないから、その間の家のこととか考えたら、もうこつこう生活してられへんかなつて。だから私さ、個展が終わつたら、地元に戻つて就職することにした。そつうなつたら、今までみたいに絵ばつかり描いてられへんと思うし、こつうやつて力を入れて個展とかするのも、もしかしたら最初で最後かも……」

「……みゆうは、それでいいん？」

私は訊かすにはいられなかった。だってあんなに一生懸命がんばつていたみゆうが、こんなにもあつさりやりたいことを諦めてし

まうなんて。無理をしているとしか思えなかったからだ。

「うん……、でも、お母さんに苦労させたくない……」

いかにも、みゆうらしい答えだった。結局、彼女は大切なものを犠牲にしてまで、自分のエゴを通すことはできない人だ。私は彼女がアートと同じ真剣さで仕事に打ち込んで、立派な社会人になってゆく姿を、容易に想像することができた。それは生活をともにした仲間としては嬉しい気もするし、少し寂しい気もする。でも、だからといって、今、私にできることは何もない。できることといえばせいぜい、彼女の決断を肯定的に受け止め、新しい一歩を後ろから笑って見送ってあげることぐらいだ。

「そっか、地元に戻っちゃうのは残念やけど、仕方ないよなあ。でもさ、個展はがんばろう！あと一ヶ月やし、お父さんの看病とかで手が回らない分は、私にできることやったら何でも手伝うよ！」

「……ありがとう」

みゆうの顔から笑顔がこぼれた。彼女は短くなった煙草を手すりに押しつけて揉み消すと、「よし、がんばるぞー！」と言って空に向かって大きく伸びをした。

私たちは何となく部屋に入りたくなくて、そのまま外でぼんやりと空を眺めていた。部屋の奥からは、点けっぱなしになったテレビの音がとぎれとぎれに聞こえてくる。ちょうど天気予報がやっているところで、カーテン越しに洩れる淡々とした気象予報士の声が、明日から吹き始める、今年最初の南風の到来を告げていた。

第五章

そして、四月になった。窓の外には、短い春の賑わいを記憶に焼き付けようとするかのように、満開の桜が咲き誇り、ふわっと風が吹くたびに舞い散る花びらは、まるで粉雪のようだ。

明日からいよいよ、みゆうの個展が始まる。

私はヤイちゃんと、「ギャラリー和音」で、朝から個展の準備に追われていた。搬入には思ったより時間がかかり、てっじさんの家から借りてきた自動車を二度往復させなければならなかった。そして、午後からはみゆうのメモをもとに、ヤイちゃんもつと上だとか下だとか言いながら作品を配置してゆき、やっと先ほどあらかた作業が終わって、一段落ついたところだった。

「ごめんねー、ほんと遅くなって！」

そう言いながら、みゆうが息を切らして階段を駆け上がった。堅苦しいグレーのパンツスーツと、いかにも染髪料で染めましたというような黒髪が、とってつけたようでまだ見慣れない。彼女はつい先日、地元の広告会社に就職が決まり、その関係で和歌山と大阪の間を行ったり来たりしており、今日も研修が終わってすぐにこっちに駆けつけてきたのだった。

「まったく、明日から個展があるって言うてんのに、わざわざこんな日に研修なんか入れてくれちゃって、むかつくったら。ほんまは私がやらんなあかんのに、二人に任せっきりにしちゃってごめんね」「いいよ、いいよ。でも、意外と早く終わったんやね」

「当たり前やん。もう是が非でも午前中に終わらせるように、念を押しといたもん。でもすごいね、もうほとんどやってくれてるんや。なんか私が出る幕ないな」

みゆうはあらためて、ほとんど展示の終わった会場の中をぐるりと見回した。そして、壁に飾られた自分の作品を一つずつ丹念に眺めていくと、ふうつと感慨深く溜息をついた。

「何だか、この日がこうやって来てるってことが、本当に夢みたい。作品を描いてる時は、画廊の予約はしてるし、チラシも刷ってるし、準備は完璧やけど、もしかしたら何かの番狂わせがあるんじゃないかって不安がいつもあったから、無事にここまでこぎつけられたのが、まだ信じられない気分」

「でも、始まったらあとは終わるばかりってというのが、ちょっと寂しいけどね」

私が言うと、みゆうは「まあね」と答えて微笑んだ。

「でもさ、考えてみれば就職したからって、全く時間がなくなるわけじゃないし、そりゃ今までのようにはいかないにしても、細々と自分の好きなこと続けていって、たまにこうやって個展すればいいのかなって、最近はそう思えるようになった。それに、仕事で何か新しい可能性が見えてくるかもしれへんしね」

みゆうはすっかり吹っ切れたみたいに、晴れ晴れとした顔で言った。

「もう個展できないかもって悩んでたくせに」

私はそう言ってからかったが、本当は嬉しかった。小さなことでウジウジ悩まずに、何でもすぐにポジティブに転換できるところが、彼女の強みなのだ。

そうやって私たち三人がしばらく話をしてると、「おお、やってるな」と言いながら、下の事務所から音二郎さんが上がってきた。「へえ、もうほとんどできてるやんか。作業早いな」

音二郎さんは今日も愛用の木彫りのパイプを吹かし、顔の半分くらい隠れそうな大きなサングラスをかけ、ド派手な真っ赤のアロハシャツにジーンズという個性的な衣装を着ている。それがいかにも昔の映画に出てくる麻薬のブローカーのようだったので、私たちは思わず吹き出してしまった。

音二郎さんは、その濃いサングラス越しに、展示された作品の一つ一つをじっくり眺めると、私たち三人をぐいっと引き寄せ、

「最高、最高、バッチグー！俺が見てきた中でも、三本の指に入

るほどの出来やね、ようがんばった！」

と、彼にしては精一杯ナウな言葉を使って、私たちを褒めちぎった。相変わらずどこからが本心でどこからがお世辞なのか分からない、調子のいい音二郎さんだけれど、不思議とそう言われて悪い気はしなかった。

「ところで、あんたらお昼はちゃんと食べたんか？ もう三時やで」

「あ……」

言われてみて初めて気がついた。そういえば、朝ここに来てから何も食べていない。

「もしよかつたら、外で何か食べてきたら？ その間、俺がここで留守番してやるから」

音二郎さんは、「私はいいですよ。来たばかりだから」と遠慮するみゆうの言葉を無視して、「まあまあ、このことは俺に任せとけて」と、半ば強引に私たちを扉の外へ押しやった。

「じゃあ、ゆっくりしてきーや。くれぐれも、ゆっくりな」

そう念を押すと、音二郎さんはいつにも増して、やけにニヤニヤしながら、私たちを送り出したのだった。

私たちは御堂筋に面した、テラスのあるカフェテリアでお昼を食べることにした。ちょうど午後の休みの時間帯で、きれいに化粧をしたOLたちがこじやれた飲み物を手に談笑する中で、作業用のTシャツとチノパン姿の私たちは、明らかに周りの風景から浮いている。しかし、何でもいいからとにかくお腹に入りたい私たちにとっては、そんな人の目など些細な問題でしかなかった。私たちは横文字の飛び交うメニューの中から、一番安くて早く出来そうな、「日替わりパスタ」を注文し、やっと一服するようにソファに体を伸ばした。

「お父さんの具合、どう？」

私はまず、このところゆっくり話もできなかつたみゆうに、気になつていたお父さんの病状のことをおそるおそる訊いてみた。

「うん、まだ入院してるんやけどね。暇を持て余してるのか、口が減らなくてさ。こっちが世話してやってんのに、やれ服の着せ方が乱暴だの、水の飲みし方がなってないだの細々といちいちうるさいの」

みゆうが思ったよりも明るく話したので、私はホツした。冗談混じりに話すということは、そんなに病状が深刻でないという、何よりの証拠だ。それから話は引越しのことになり、みゆうは個展が終わって少し落ち着いた四月下旬頃には、実家に帰るつもりだと話した。

「でもさー、私がいなくなると、あの部屋もだいぶ広く使えるんじゃない？」

「確かに広くはなるけど、その分、家賃も高くなるんじゃない！」
私が言つと、隣で水を飲んでいたヤイちゃんの手が、急に止まった。

「あのー、それがさ……」

彼女は目を私の頭上あたりに泳がせながら、おずおずと話を切り出した。

「私も実は、みゆうの個展が終わったら、あの部屋を出ようかと思ってるんだよね。てっじさんに、一緒に住まないかって誘われてて……」

「ええっ、そうやったん？」

私はびっくりして、つい店内に響くような大声で叫んでしまった。周りにいたO.Lたちの何人かが、白い目でこっちを振り返った。

「ごめんね、ずっといつ言おう、いつ言おうって考えててんけど、みゆうもチイちゃんも個展の準備で忙しそうやったから、なかなか言い出せなくて」

ヤイちゃんはそう言って、申し訳なさそうに手を合わせた。

「でもさ、てっじさんと暮らすってことは、あの勇気とも一緒に暮らすってことやる？ あんな扱いにくいガキと一緒に、ヤイ子大丈夫？」

口の悪いみゆうが、そう言ってヤイちゃんをからかった。

「うん、でもね、あの子ああ見えてけっこう繊細やし、かわいいところもあるんやって。ねー、チイちゃん？」

「うん……」

頷きながらも、私は自分の気持ちがあまく整理できずにいた。確かに、このところずっとつじさんの家に入り浸っていたヤイちゃんだから、こうなるのは自然の流れといえそうだ。でも、私たちの同居生活が、こんな形であっけなく終わりを迎えてしまうなんて私にはにはわかには信じられなかったのだ。

しかし、その別れは予想していたよりもずっと、穏やかで淡々としたものだった。正直、私はもし私たちが離ればなれになる時が来たら、もっと大きな波のような悲しみが押し寄せてくるとばかり思っていた。だけど、今私の胸に去来しているのは、悲しみよりももっと漠然とした諦観のようなものだった。私たちはこうして人生の大きな節目を、ちょうど緩やかな直線がゆっくりカーブに差しかかるように、それと気付かずにくつも通り過ぎていくものなのだろうか。もちろんそこに、一抹の寂しさが従うのは確かだ。けれど、私たちは意外と、新しい変化を柔軟に受け入れてしまうことができるのかもしれない。

私はまた、居酒屋で父の言っていたことが少し分かった気がした。

パン、パン、パン、パン！

ギャラリィに戻ると、扉を開けるやいなや、勢いのいいクラツカーの破裂音が、部屋中に鳴り響いた。奥ではつじさんと勇気が「おめでとう」と手を叩いて私たちを出迎え、その隣では音二郎さんが、突然のサプライズに言葉も出ない私たちを見て、ニヤニヤと笑っていた。

「お疲れさま、これ僕と勇気からのお祝いです」

つじさんはそう言うと、抱えていた大きな花束をみゆうに渡した。

「うわー、私こんなのもらったの初めて。ありがとうございます！」
「いえいえ、これくらいしかできないですから。でも、ほんと倉田さんの個性がよく出た、いい作品が揃ってますよね。短い時間でよくこれだけ頑張りましたよ」

みゆうはてつじさんの言葉に、感極まって涙をこぼした。それを見ると、私たちの胸にもぐっと熱いものが込み上げてきて、私たちは長いようで短かった今までの道のりをお互いに称えるように、みんな抱き合った。

それからは、てつじさんや勇気も作業を手伝ってくれ、私たちは準備作業の最終仕上げに取りかかった。事務所から長机を持ってきて、二階に上げ、受付を用意する。てつじさんはその合間にも、ヤイちゃんの頭をコツン小突いたり、「やよい」とさりげなく彼女を名前で呼んだりしていて、アツアツぶりを見せつけていた。私はそれを見て、からかうように言った。

「聞きましたよ、ヤイちゃんと一緒に住むんですって？」
するとてつじさんは、「ああ、そのことですか」と言って、アンケート用紙の準備をしながら、照れくさそうに笑った。

「いやー、勇気のこともあるからどうかなって思ってたんですけど、当のあいつが応援してくれたから、それに背中を押されたって感じですかね」

「へー、勇気がそんなことを？」

私は驚いて尋ねた。

「そう。ある日、スーパー袋いっぱい粉々の紙くずの山を持って帰ってきたかと思ったら、『もう僕は大丈夫だから、兄さんも自分のこと考えなよ』って。弟に心配されるなんて、ふがない兄ですよ。でも、ずっとあいつのことかわいそうで守ってやらなきゃいけない存在だと思っていたけど、今考えると、それは僕が見くびってただけなのかもしれないって気がしますよ。本当はあいつは、僕が思っているよりもずっと強い。最近をよくそう思うようになりましたね」

「勇気は、僕が思っているよりもずっと強い。」

そう言うてつじさんの表情は、嬉しそうでもあり、どこか寂しうでもあった。私はあの公園でノートを破いた日のことを思い出し、クスクスと一人で笑った。てつじさんはそんな私を見て、何がおかしいのか分からずに、不思議そうに首を傾げていた。

「勇気は私たちから少し離れて、壁際の一枚の絵の前で立ち止まっていた。私が肩を叩いて「よっ！」と声をかけると、彼は振り返って、相変わらず無愛想に「おう」と返事をした。」

「この絵、好きなん？」

「別に。ちよつと気になつたから見てただけ」

その絵はみゆうが最後に描いていた、あの畳一枚ほどの大作だった。それは「道のり」というタイトルがつけられていて、個展に出した中でも、彼女が最も力を入れたと言えるものの一つだった。

いつももうさぎをモチーフにしている彼女にしては、珍しく人を描いた作品。そこには、海を思わせるブルーの背景に、三頭身の輪郭線と顔の表情のみにデフォルメされた人たちがたくさん、水の中を漂流するかのようにふわふわと所在なく描かれている。彼らの目はあの漫画喫茶で出会った人たちのように、どこか物憂げに宙を漂っているように見えた。

この絵には次のような詩が添えられていた。

私たちは浮遊している

可能性の海の中

広がる未来を目の前にして

全てのものに手が届くのに

何ものにもなれないと

君は嘆く

誰かの決めた幸福を

押しつけられたくなくて

旅路についた
しかしその道が正しいのかと
人に聞かれるたび
私は迷う

私たちは恐れている
命綱のない自由を
足跡のない新開地を
自分の存在意義を求めながら
誰かに像を与えられなければ
自分が自分であることが
時々、あいまいになる

私たちは浮遊してゆく
理想と現実のはざま
幼さと成熟の境界
架空の未来に
安住の地を求めて

私は今までのみゆうの作品の中で、これが一番好きだった。そして、みゆうもまた、私たちと同じように、迷っていたのだと思った。いつだつて意志がはつきりしていて、ためらいなんてなさそうに見える。そんな彼女でさえも、うわべでは分からない不安や焦りを抱えていたのだ。結局、そんなものなのかもしれない。みんな他人の中に自分がないものを見て羨ましがるけれど、本当のところは、しよせん本人にしか分からないのだ。

「ねえねえ」

くい入るように絵を見つめていた私を、勇気が呼んだ。見ると、彼はいつの間にか小脇にスケッチブックのようなものを抱えて、私の前に立っていた。

「描いたぞ」

彼はそう言うと、スケッチブックをめくって、中身を私に見せてくれた。開かれたページには、緻密なコマ割りや背景の代わりに、どこかの漫画にでも出てきそうな、剣を持ったヒーローの姿が、ぼつんと描かれている。その絵は久しぶりに描いたことが一目で分かるくらい、線もただどしく、あまり上出来とは言えなくて、思わず吹き出してしまった。

「なんだよ、せっかく一生懸命描いたのに」

「下手くそ。全然、人のこと言えへんやん」

勇氣は「何だと、あんたよりマシだろ」と、顔を真っ赤にして怒り出した。私はそれを見て、さらに笑った。ムキになっていつものポーカーフェイスを崩した彼の顔は、意外に子供っぽく、ひまわりのような無邪気さが、ひしゃげた表情の中に時折顔を覗かせている。窓の外を見ると、強い突風に吹かれた桜の枝が、乱舞のように花びらを舞い散らせていた。この花もあと一週間もすれば、風と雨に晒されて、貧相な地肌が姿を現すようになるだろう。そう思うと、少し寂しい。

なあ、チハル、花だって遠くから見るときれいだけど、近くで見たら汚い部分も見えてくる、現実なんてそんなもんじゃないか？

また、父の言葉を思い出した。父は花を人生に例えて、現実を受け入れると私に言った。ならば、目の前の光景も、一つの人生の縮図と言えるんじゃないだろうか。満開に咲き誇った桜も、やがては散って、一年の後にまた美しい花を咲かせるように、私たちもまた何かを掴んだと思って、決してそれはゴールではなく、一つの花を咲かせたに過ぎないんじゃないだろうか。開花と落葉を延々と繰り返す木々のように、私たちもきつと、希望と失望の間を行ったり来たりしながら、絶えず新しい目標を追い求めて、走り続けてゆくのだ。

「なんだよ、ポーツとして。もしかして、落ち込んだ？」

私たちは浮遊してゆく

すると、ぼんやりと窓の外を眺めていた私の顔を、勇気が心配そうに覗き込んだ。

「まさか」

私はそう言って勇気の額を軽く小突くと、作業を残していた受付の机のところに戻った。

明日からいよいよ、みゆづの個展が始まる。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4630d/>

私たちは浮遊してゆく

2009年3月24日10時28分発行